ミャンマー連邦
社会福祉行政官育成プロジェクト
中間レビュー調査報告書

平成 22 年 1 月
（2010年）

独立行政法人国際協力機構
人間開発部

人 間
ＪＲ
10-127

ミャンマー連邦
社会福祉行政官育成プロジェクト
中間レビュー調査報告書

平成 22 年 1 月
（2010年）

独立行政法人国際協力機構
人間開発部

序　　文

ミャンマー連邦社会福祉救済省社会福祉局は1953年に設置され、障害者を含む社会的弱者に対する各種公的福祉サービスの提供及びボランティア団体等への資金援助を行っている組織ですが、各ニーズに合った施策立案・サービス提供等が十分に行われていないことから、社会福祉に携わる行政官育成を目的とする協力がわが国に対して要請され、2006年度案件として採択されました。

その後、協力内容をより具体化するためのミャンマー連邦側との協議が行われ、社会福祉行政全般を協力分野とすることは困難であるため、ろう者の団体やろう学校との協力による標準手話の策定・普及を社会福祉行政官の育成の足掛かりとすることとなりました。これを踏まえ、社会福祉救済省社会福祉局をカウンターパート（C/P）機関とし、長期専門家が派遣された2007年12月から3カ年（2010年12月まで）のプロジェクトとして協力が開始されました。

プロジェクトでは、ろう者を主体としつつ、行政、ろう学校関係者が協働して標準手話を策定するとともに、標準手話普及のための教材作成、研修やワークショップを実施しています。また、この一連のプロセスを通じて、ろう者の社会参加を促進するとともに、行政官が社会的弱者のニーズに適した社会福祉行政を実施するための能力向上を図っています。

今般、協力期間が半ばを経過したことを踏まえ、本プロジェクトの目標達成度や成果等を分析するとともに、今後の展開に向けた活動計画、成果及びプロジェクト目標の再検討を行うため、2009年11月26日から12月12日にかけて、ミャンマー側関係機関との共同作業により中間レビュー調査を実施しました。

本報告書は、同調査結果を取りまとめたものであり、今後の展開に活用されることを願うものです。

終わりに、本調査にご協力とご支援を頂いた内外関係者の方々に、深く謝意を表するとともに、引き続き一層のご支援をお願い申し上げます。

平成22年1月

独立行政法人国際協力機構
人間開発部長　萱島　信子

目　　次

序　文
目　次
地　図
写　真
略語表
評価調査結果要約表

第１章　中間レビュー調査の概要……1
　１－１　調査団派遣の経緯と目的……1
　１－２　調査団構成及び日程……1
　１―３　主要面談者……3
　１－４　中間レビュー調査の方法……4

第２章　プロジェクトの実績と現状……7
　２－１　投入の実績……7
　２－２　成果の達成状況……7
　２－３　プロジェクト目標の達成見込み……12
　２－４　上位目標達成の見通し……14
　２－５　プロジェクト実施体制……14
　２－６　実施プロセスの状況……16

第３章　中間レビュー結果……17
　３－１　妥当性：高い……17
　３－２　有効性：高い……18
　３－３　効率性：高い……18
　３－４　インパクト：高い……19
　３－５　自立発展性：中程度……19
　３－６　結論……20

第４章　提言と今後の協力方針……22
　４－１　提言……22
　４－２　プロジェクト計画の見直し（PDM1）……22
　４－３　今後の協力方針……23

第５章　団員所感……24
　５－１　森　壮也　団員（手話教授法）……24
　５－２　河原　雅浩　団員（ろう者のエンパワーメント）……26

付属資料

１．評価グリッド……31
２．署名ミニッツ文書（Minutes of Meetings）……35
３．PDMの改訂検討（比較表）……65

CHINA
カカーボラージー山
5881m
BHU.
Brahmaputra
INDIA
CHINA
ミッチーナー
BANGL.
バモー
Irrawaddy
Mekong
BANGL.
モンユワ
マンダレー
チャイントン
バガン
チャウク
タウンジー
LAOS
シットウェ
（アキャブ）
ピンマナー
タウングー
プローム
（ピー）
ベンガル湾
バゴー
ヤンゴン
モーラミャイン
パテイン
（バセイン）
THAILAND
ダウェー
アンダマン海
ANDAMAN
ISLANDS
(INDIA)
コータウン
タイ湾
0 100 200 300km
プロジェクト・サイト

ミャンマー側との協議

模擬授業視察

森団員による講義

河原団員による講義

ワークショップ風景

ろう学校視察

統合教育実践高校視察

JICAミャンマー事務所報告

略　語　表

略　語	正式名称	和　訳
APCD	Asia-Pacific Development Center on Disability	アジア太平洋障害者センター
C/P	Counterpart	カウンターパート
DSW	Department of Social Welfare, Ministry of Social Welfare, Relief and Resettlement	ミャンマー社会福祉救済省社会福祉局
JCC	Joint Coordination Committee	合同調整委員会
NA	Natural Approach	ナチュラル・アプローチ
PDM	Project Design Matrix	プロジェクト・デザイン・マトリックス
PDM e	Project Design Matrix for Evaluation	評価用PDM
PO	Plan of Operation	活動計画
R/D	Record of Discussions	実施協議・討議議事録
SSL	Standard Sign Language	標準手話

評価調査結果要約表

１．案件の概要	
国名：ミャンマー連邦	案件名：社会福祉行政官育成プロジェクト
分野：社会保障	援助形態：技術協力プロジェクト
所轄部署：人間開発部高等教育・社会保障グループ社会保障課	協力金額（評価時点）：1億2,133万円
協力期間（R/D）： 2007年12月～2010年12 月（3年間）	先方関係機関：社会福祉救済省社会福祉局
	日本側協力機関：全日本ろうあ連盟、厚生労働省国立障害者リハビリテーションセンター、日本貿易振興機構アジア経済研究所

１－１　協力の背景と概要

ミャンマー連邦（以下､「ミャンマー」と記す）社会福祉救済省社会福祉局（Department of Social Welfare, Ministry of Social Welfare, Relief and Resettlement：DSW）は1953年に設置され、障害者を含む社会的弱者に対する各種の公的福祉サービスの提供及びボランティア団体等への資金援助を行っている。しかしながら、さまざまな支援のニーズに合った施策立案・サービス提供等についての充分な対応が行われていないことから社会福祉に携わる行政官育成の協力要請があり、2006年度案件として採択された。

その後、協力内容をより具体化するためのミャンマー側との協議が行われ、社会福祉行政全般を協力分野とすることは困難であるため、ろう者の団体やろう学校と協力し、ミャンマー手話[1]の策定・普及を実施することを社会福祉行政官の育成の足掛かりとすることとなった。これを踏まえた本プロジェクトは、DSWをカウンターパート（Counterpart：C/P）機関として、ろう者を主体としつつ、行政やろう学校関係者が協働してミャンマー手話を策定するとともに、この普及に活用する教材を作成し、同教材を用いたミャンマー手話に関する研修やワークショップを実施している。また、ミャンマー手話策定・普及に係る一連のプロセスを通じて、ろう者の社会参加を促進するとともに、社会的弱者のニーズに適した社会福祉行政実施能力の向上を図っている。なお、プロジェクト活動の中核として、社会福祉局職員、ろう学校教員、ろう者からなるタスクフォースを結成し、ミャンマー手話会話集の作成、当該教材に基づく手話教授法の習得を行っており、今後はろう者とその家族、手話通訳候補者、ろう学校教師等に対するミャンマー手話普及活動が計画されている。

１－２　協力内容

（1）上位目標[2]

ヤンゴンとマンダレーにおいてミャンマー手話が普及することで、ろう者の社会参加が促進される。

---

[1] ミャンマーにおいて、標準的に使用される手話のこと。当初、本プロジェクトにおいては標準手話（Standard Sign Language：SSL）を用いていたが、中間レビュー時の際ミャンマー側の意向により、今後、ミャンマー手話（Myanmar Sign Language）という文言を用いることが合意された。

[2] PDM Ver.0の上位目標を評価グリッド作成時に、評価指標に合わせて明確化した。

（2）プロジェクト目標[3]

社会福祉行政官とろう者コミュニティが共同でミャンマー手話を普及する体制が構築される。

（3）成果（アウトプット）[4]

成果1：タスクフォースがミャンマー手話教材及び手話研修を評価する技術を習得する。

成果2：ミャンマー手話教材文法編がろう者コミュニティの主導により作成される。

成果3：タスクフォース、ファシリテーターがミャンマー手話会話集に基づき、手話指導の技術を習得する。

成果4：ろう者に関するコミュニティ（一般市民）の意識が向上する。

（4）投入（中間レビュー時点）

1）日本側

長期専門家（業務調整・研修計画）（1名）

短期専門家

- 標準手話教材評価（1名）
- 標準手話教材開発（3名）
- 標準手話教授法（3名）

本邦研修

- 標準手話及び教材開発（10名）
- 標準手話教授法（11名）

機材　PC、コピー機、デジタルカメラ、ビデオ、DVDプレーヤー等

在外事業強化費

運営指導

2）相手国側

カウンターパート配置

専門家執務スペース

２．評価調査団の概要

調査者	総括/障害者支援	久野　研二	JICA人間開発部　国際協力専門員
	手話教授法	森　　壮也	日本貿易振興機構アジア経済研究所　新領域研究センター貧困削減・社会開発研究グループグループ長代理/開発スクール教授/主任研究員
	ろう者のエンパワーメント	河原　雅浩	（財）全日本ろうあ連盟　本部事務所長補佐
	協力企画	中島　啓祐	JICA人間開発部社会保障課
	評価分析	伊藤　治夫	JCONS国際協力（株）社会開発部　主任コンサルタント

[3] PDM Ver.0のプロジェクト目標を評価グリッド作成時に、評価指標に合わせて明確化した。

[4] PDM Ver.0の成果（アウトプット）を評価グリッド作成時に、評価指標に合わせて明確化した。

	手話通訳	小川　加代子	（財）全日本ろうあ連盟
	手話通訳	森本　行雄	社会福祉法人聴力障害者情報文化センター 地域支援部門部長
	手話通訳	宮原　麻衣子	
調査期間	2009年11月26日～12月12日		評価種類：中間レビュー

３．評価結果の概要

３－１　実績の確認

（1）プロジェクトの成果

本プロジェクトは、中間レビュー時点において主要な活動を終了している。一方でDSW及びタスクフォースメンバーの意向により、管区・州レベルでのミャンマー手話研修の普及にかかわる活動が今後計画されている。このようにプロジェクトの活動が順調に進捗し、プロジェクト効果の普及に関する計画が策定された要因は、プロジェクトがミャンマー側関係者のオーナーシップの醸成に努めたことにあると考えられる。

（2）プロジェクト目標

社会福祉行政官及びろう者コミュニティから選定されたメンバー間の効果的な連携により、タスクフォースによる手話の普及に向けた体制が整備されつつある。また、プロジェクトで作成された手話会話集の受領者及び手話研修の参加者からのプロジェクトへの評価が高いことからも、タスクフォース及びファシリテーターは手話普及のための基礎的な能力を習得しているといえる。

（3）上位目標

プロジェクト中間レビュー時点において、マンダレー及びヤンゴンでの手話研修参加者の満足度、手話への理解度、ろう者への理解が向上していることが確認された。ミャンマー手話が普及することにより、一般市民のろう者に対する意識が向上し、ろう者の社会参加の推進が期待される。

３－２　評価結果の要約

（1）妥当性：高い

本プロジェクトは、ミャンマー政府による社会福祉政策及び日本側の援助政策と合致する。わが国は、手話通訳の養成、メディアによる啓発活動にも豊富な経験と実績を有しており、プロジェクト・デザインにおいてこれらの経験が有効に反映されている。

プロジェクトで作成された手話会話集はろう者コミュニティが中心となり作成した手話教材として、関係者から高い評価を得ている。また、プロジェクトにより2009年5月から開始された手話研修は既に835名が自主的に参加しており、参加者の大部分が研修に満足していることからも手話研修への高いニーズと評価が確認された。

（2）有効性：高い

本プロジェクトの成果はいずれもプロジェクト目標である「社会福祉行政官とろう者コ

ミュニティが共同でミャンマー手話を普及する体制が構築される。」に貢献しており、有効性は高い。他の管区・州における手話研修の普及が今後も計画されており、DSWの同活動に対する高いオーナーシップが確認されていることからも、プロジェクト期間内でのプロジェクト目標の達成が見込まれる。

手話会話集の作成、手話研修の実施を通して、当事者であるろう者のエンパワーメントが効果的に行われたことがプロジェクト目標達成に対する促進要因といえる。

(3) 効率性：高い

短期専門家、本邦研修はプロジェクト活動の進捗に合わせて、計画どおりに実施され、量、質、タイミングともに適切であり、成果発現に貢献している。日本人長期専門家はミャンマー側プロジェクト関係者から高い信頼を得ており、彼らのオーナーシップの醸成を図ることで、効率的なプロジェクト運営に大きく貢献している。

タスクフォース、ファシリテーターのメンバーは、DSW職員及びろう学校を含むろう者コミュニティといった既存の組織から選出されている。また、タスクフォースの活動は自主性に任されておりプロジェクト運営経費を最小限に抑えるなど、現地リソースを活用した効率的なプロジェクト運営が行われている。

(4) インパクト：高い

上位目標には「ろう者の社会参加促進のためのミャンマー手話の普及」が計画されており、ミャンマー政府は手話普及に対して積極的に取り組んでいる。また、ろう者の社会参加促進のためには、一般市民のろう者への理解が必要となるが、現在実施されている手話研修参加者の90%が、研修受講によりろう者への理解が深まったと回答していることからも、手話研修が全国で実施されることにより、上位目標が達成される可能性が高い。

タスクフォースのろう学校教員、ろう協会会員が同僚や他の会員への手話文法、教授法に関する知識を共有していることが確認された。また、短期専門家派遣による日本からの手話通訳者のかかわりにより、特にヤンゴンにおいて、ろう学校教員が手話通訳をする際のろう者に対する姿勢が改善された。このことは、ろう者の自由な発言を促進し、同時にろう者と聴者間のコミュニケーションを向上させることとなり、結果的にろう者の社会参加につながっている。

(5) 自立発展性：中程度

社会福祉局は積極的にプロジェクトを支援しており、高いオーナーシップが確認された。ミャンマー手話の普及に関して、他管区・州の社会福祉局を取り込んだ普及計画を策定していることは、社会福祉局のプロジェクトへの長期的なコミットメントを示している。タスクフォースもプロジェクト活動に関して、高いオーナーシップをもって取り組んでいる。他方、現状ではファシリテーターの手話指導能力はタスクフォースと比べるとやや低いこともあり、ファシリテーターが手話指導を行う機会等が限定されていることに対する不満の声がある。今後は、ミャンマー手話を他地域へ普及する際のファシリテーターの役割の明確化、研修機会の提供が求められる。

また、手話会話集、手話研修に対する関係者からの高い評価は、タスクフォースの能力

の向上を示すものであり、継続的な手話の普及の促進が期待される。一方で、プロジェクト効果のモニタリング及びフィードバックは日本人専門家により実施されているため、今後、タスクフォースへの同業務の移管を進めることで、自立発展性の向上が期待される。

３－３　結論

本プロジェクトは、ミャンマー手話の普及のために必要となる人材育成に大いに貢献している。中間レビュー時点において多くの成果が達成されており、プロジェクト目標の達成可能性も高いことが想定される。このように活動が順調に実施されてきた背景には、プロジェクト活動を通してろう者のエンパワーメントが促進され、それに伴い聴者の意識改革によるろう者、聴者間の連携体制が強化されたことが要因として挙げられる。また、5項目評価を通じても高い評価結果となっており、残りのプロジェクト期間で自立発展性の向上に向けた取り組みが期待される。

３－４　提言（当該プロジェクトに関する具体的な措置、提案、助言）

(1) ミャンマー手話の全国への普及に関する計画の策定

現在、ヤンゴン及びマンダレーにおいて、プロジェクトの成果は予定どおり達成される見込みである。このプロジェクトの成果については、残りの協力期間内にミャンマーのほかの管区・州にまで広げることが想定されている。この普及については、対象地域の広がりとともに、各管区・州の社会福祉局職員等の関係者も増えてくることから、そのターゲット（対象地域、参加者、内容と頻度）を明確にしてより実行可能性のある計画を早急に策定する必要がある。

(2) ファシリテーターの役割の確認と活用

ファシリテーターについては、手話教授に係る基礎的な知識・技術を習得しているものの、その知識・技術を発揮できる場が非常に限られている現状にある。今後、ミャンマー手話を普及させていくにあたり、このファシリテーターの活用はより重要になってくると思われる。ファシリテーターの役割と責任を明確にしつつ、ファシリテーターに対するトレーニングの機会等をより積極的に提供していくことが望まれる。

(3) 短期専門家の派遣期間の延長

中間レビューの結果、本邦研修や短期専門家による指導はプロジェクトの推進に大きな役割を果たしていることが示された。しかしながら、それぞれの投入期間が短いことで、その成果が限られたものになっていると思われる（現行の約2週間の専門家派遣期間では、講師からのインプットだけに終始する傾向がある）。受講者からの理解度の確認・評価を行いつつ、更なる知識の定着を図る試みが加わることによってより高い成果を達成することができると考えられる。また、JICA-Netを活用した支援等のフォローアップ活動についても検討することが望ましい。

(4) タスクフォースによる手話会話集・手話研修に対するモニタリング・評価の実施

現在、手話研修に対するモニタリング・評価については日本人専門家を中心に実施され

ている。プロジェクト成果を継続的に発展させるためには、これらのモニタリング・評価についてもタスクフォースが実施できるようになることが必要である。残りの協力期間において、タスクフォースメンバーの能力向上を図っていくための活動の実施が望まれる。

３－５　プロジェクト・デザイン・マトリックス（PDM）の改定

プロジェクト開始当初に承認されたPDM　Ver.0は、その後のプロジェクトの進行及び今回の中間レビューの結果を踏まえ、指標の再設定及び、その指標に合わせたプロジェクト目標、上位目標、成果の記載内容について、現実に即した形での変更が望ましいと判断された。これを受けて見直しの結果を踏まえた、PDM Ver.1（案）を策定した。

PDM Ver.1（案）で改定した各項目の概要は以下のとおりである。

（1）上位目標

ろう者の社会参加促進のため、社会福祉行政官とろう者コミュニティ及びその他プロジェクト関係者により、全国にミャンマー手話が普及する。

（2）プロジェクト目標

社会福祉行政官とろう者コミュニティ及びその他プロジェクト関係者が共同でミャンマー手話を普及する体制が強化される。

（3）成果（アウトプット）

①　タスクフォースがミャンマー手話教材及び手話研修を評価する技術を習得する。
②　ミャンマー手話会話集がろう者コミュニティの主導により作成される。
③　タスクフォース、ファシリテーターがミャンマー手話教材に基づき、手話を指導する技術を習得する。
④　ろう者に関するコミュニティ（一般市民）の意識が向上する。

なお、PDM Ver.1（案）は、プロジェクト関係者との協議を踏まえて、次回の合同調整委員会（Joint Coordination Committee：JCC）において調整・合意される予定である。

第１章　中間レビュー調査の概要

１－１　調査団派遣の経緯と目的

（1）調査団派遣の経緯

ミャンマー社会福祉救済省社会福祉局（DSW）は1953年に設置され、障害者を含む社会的弱者に対する各種の公的福祉サービスの提供及びボランティア団体等への資金援助を行っている。しかしながら、支援を必要とする集団それぞれのニーズに合った施策立案・サービス提供等についての充分な対応ができていないことから、社会福祉に携わる行政官育成を目的とするプロジェクトの協力が要請され、2006年度案件として採択された。

その後、協力内容をより具体化するためのミャンマー側との協議が行われ、社会福祉行政全般を協力分野とするのは困難であるため、ろう者の団体やろう学校と協力し標準手話の策定・普及を実施することを社会福祉行政官の育成の足掛かりとすることとなった。これを踏まえて、本プロジェクトは、DSWをカウンターパート（C/P）機関とし、長期専門家が派遣された2007年12月から3カ年（2010年12月まで）のプロジェクトとして協力が開始された。

プロジェクトでは、ろう者を主体として行政（公立のろう学校を含む）やNGOが運営するろう学校関係者が協働してミャンマーにおけるミャンマー手話を策定するとともに、この普及に活用する教材を作成し、同教材を用いてミャンマー手話に関する研修やワークショップを実施している。ミャンマー手話策定・普及に係る一連のプロセスを通じて、ろう者の社会参加を促進するとともに、社会的弱者のニーズに適した社会福祉行政実施能力の向上を図っている。

今般、協力期間が半ばを経過したことを踏まえ、本プロジェクトの目標達成度や成果等を分析するとともに、今後の展開に向けて活動計画、成果及びプロジェクト目標の再検討を行うことを目的とした中間レビュー調査が計画された。

（2）中間レビュー調査の目的

本調査は、C/Pと合同で本プロジェクトの目標達成度や成果等を分析するとともに、今後の展開に向けて活動計画、及びプロジェクト目標・成果の再検討を行い、合同評価報告書に取りまとめ、合意することを目的とする。なお、必要に応じてプロジェクト・デザイン・マトリックス（Project Design Matrix : PDM）及び活動計画（Plan of Operations : PO）の改定を行う。

１－２　調査団構成及び日程

（1）調査団構成

担当	氏名	所属
総括/障害者支援	久野　研二	JICA人間開発部　国際協力専門員
手話教授法	森　　壮也	日本貿易振興機構アジア経済研究所　新領域研究センター貧困削減・社会開発研究グループ　グループ長代理/開発スクール教授/主任研究員
ろう者のエンパワーメント	河原　雅浩	（財）全日本ろうあ連盟　本部事務所長補佐

協力企画	中島　啓祐	JICA人間開発部社会保障課
評価分析	伊藤　治夫	ICONS国際協力（株）社会開発部　主任コンサルタント
手話通訳	小川　加代子	（財）全日本ろうあ連盟
手話通訳	森本　行雄	社会福祉法人聴力障害者情報文化センター　地域支援部門　部長
手話通訳	宮原　麻衣子	

（2）日程

<table>
<tr><th colspan="2" rowspan="2">月日</th><th colspan="3">内容</th><th rowspan="2">場所</th></tr>
<tr><th>伊藤</th><th>河原、小川、森本、久野、中島</th><th>森、宮原</th></tr>
<tr><td>11月26日</td><td>木</td><td>成田⇒ヤンゴン</td><td colspan="2" rowspan="7"></td><td>ヤンゴン</td></tr>
<tr><td>27日</td><td>金</td><td>JICAミャンマー事務所、長期専門家インタビュー
（DSW訪問・インタビュー）</td><td>ヤンゴン</td></tr>
<tr><td>28日</td><td>土</td><td>プロジェクト関係者聞き取り調査（ヤンゴン）
社会福祉局副局長DyDGインタビュー</td><td>ヤンゴン</td></tr>
<tr><td>29日</td><td>日</td><td>プロジェクト関係者聞き取り調査（ヤンゴン）</td><td>ヤンゴン</td></tr>
<tr><td>30日</td><td>月</td><td>プロジェクト関係者聞き取り調査（マンダレー）</td><td>ヤンゴン</td></tr>
<tr><td>12月1日</td><td>火</td><td>プロジェクト関係者聞き取り調査（マンダレー）
社会福祉局DGインタビュー</td><td>ヤンゴン</td></tr>
<tr><td rowspan="2">2日</td><td rowspan="2">水</td><td>調査結果まとめ、ワークショップ準備</td><td colspan="2" rowspan="2">成田⇒ヤンゴン</td><td rowspan="2">ヤンゴン</td></tr>
<tr><td>団内打合せ（調査結果共有）</td></tr>
<tr><td>3日</td><td>木</td><td colspan="3">JICAミャンマー事務所、プロジェクト打合せ
ワークショップ準備</td><td>ヤンゴン</td></tr>
<tr><td>4日</td><td>金</td><td colspan="3">団内打合せ、ワークショップ準備</td><td>ヤンゴン</td></tr>
<tr><td>5日</td><td>土</td><td colspan="3">ワークショップ</td><td>ヤンゴン</td></tr>
<tr><td>6日</td><td>日</td><td colspan="2">ワークショップ</td><td>ヤンゴン⇒バンコク⇒</td><td>ヤンゴン</td></tr>
<tr><td>7日</td><td>月</td><td colspan="2">ヤンゴン⇒マンダレー
マンダレーDSW表敬</td><td>⇒日本</td><td>マンダレー</td></tr>
</table>

8日	火	マンダレーろう学校視察 マンダレー学校（A la ka middle School）視察 マンダレー学校（High School No.7）視察		マンダレー
9日	水	マンダレー⇒ヤンゴン マンダレー学校（Dagon High School No.3）視察 ミニッツ案作成		ヤンゴン
10日	木	中間レビュー結果報告（ミニッツ案提示）		ヤンゴン
11日	金	ミニッツ署名、 在ミャンマー日本大使館、JICAミャンマー事務所報告、 ヤンゴン⇒バンコク⇒		ヤンゴン
12日	土	⇒日本		

１―３　主要面談者

（1）社会福祉救済省社会福祉局（DSW）

U Soe Kyi	Director General, Department of Social Welfare, Ministry of Social Welfare, Relief and Resettlement（DSW）
U Aung Tun Khine	Deputy Director General, DSW

（2）タスクフォースメンバー

Mr. Aung Kyaw Moe	Deputy Director of Mandalay Division, Ministry of Social Welfare, Relief and Resettlement, Department of Social Welfare
Ms. Yu Yu Swe	Assistant Director, Ministry of Social Welfare, Relief and Resettlement, Department of Social Welfare
Ms. Khin San Yee	Principal, Mandalay School for the Deaf
Ms. Thida Swe	Teacher, Mandalay School for the Deaf
Ms. Myat Myat Soe	Teacher, Mandalay School for the Deaf
Ms. Bway Say Wah	Vice Principal, Mary Chapman School for the Deaf
Ms. Myitzu Thein	Teacher, Mary Chapman School for the Deaf
Ms. Mai Nwe Ni	Teacher, Mary Chapman School for the Deaf
Mr. Kyaw Yu	President, Yangon Deaf Association
Mr. Tin Aye Ko	Secretary, Yangon Deaf Association
Mr. Bo Bo Kyaing	Adviser, Yangon Deaf Association
Mr. Win Naing	Public Relations, Yangon Deaf Association
Ms. Naw Hsar Paw	Vocational Teacher, Mary Chapman School for the Deaf
Ms. Naw Shee Myar	Volunteer, Mary Chapman School for the Deaf
Mr. Kyaw Zin Win	Chairman, Mandalay Deaf Youth Development Centre
Mr. Myat Aung Naing Thant	Vice Chairman, Mandalay Deaf Youth Development Centre

Mr. Aung Aye Soe	Fund Raising, Mandalay Deaf Youth Development Centre
Mr. Tun Min Aung	Working Committee, Mandalay Deaf Youth Development Centre
Ms. Yadana Aung	Secretary, Mandalay Deaf Youth Development Centre
Ms. Maw Maw Soe	Member Affairs, Mandalay Deaf Youth Development Centre

（3）在ミャンマー日本大使館

鈴鹿　光次	参事官
吉村　藤謙	二等書記官

（4）JICAミャンマー事務所

宮本　秀夫	所長
佐藤　公平	次長
本田　賀子	企画調査員

（5）プロジェクト

小川　美都子	専門家

１－４　中間レビュー調査の方法

（1）調査項目

本中間レビューはプロジェクトの実績と実施プロセスを把握し、特に妥当性、効率性等の観点から評価し、必要に応じて当初計画の見直しや運営体制の強化を図ることを目的としている。よって、本評価では、2007年2月7日に作成されたPDM Ver.0及び活動計画（Plan of Operation : PO）に基づき、プロジェクトの実績、実施プロセス、評価5項目（妥当性、有効性、効率性、インパクト、自立発展性）を検証するために、評価グリッドを作成し、各項目に関して評価を行った。評価5項目の視点は以下のとおりである。

妥当性	プロジェクト実施の必要性、正当性に関する評価 プロジェクト目標、上位目標が、政府の開発目標や、受益者ニーズに合致しているか。また、上位目標、プロジェクト目標、成果（アウトプット）及び投入の相互関連性に整合性があるか。
有効性	プロジェクトの効果に関する評価 プロジェクトの実施が、受益者や社会に便益をもたらしているか。成果（アウトプット）及びプロジェクト目標の評価時点での達成状況及び将来達成する見込み。
効率性	プロジェクトの効率性に関する評価 プロジェクトの投入と成果（アウトプット）の関係において、資源が有効に利用されているか。投入の時期、質、及び規模は適切であるか。

インパクト	プロジェクトの長期的、波及的効果に関する評価 プロジェクトが実施されたことにより直接的、間接的な正負の影響が生じているか。また、計画当初に予想されなかったものがあるか。
自立発展性	プロジェクト終了後の便益・開発効果の自立発展性に関する評価 援助の終了後、プロジェクトで発現した効果が持続するか。政策、財政、組織・制度、技術などの側面において、プロジェクトで実施された活動が継続的に行われるための基盤・支援があるか。

（2）情報・データ収集方法

評価グリッドに基づいて以下の方法で情報・データを収集し、評価分析を行った。

1）関係資料のレビュー

- ミャンマー「社会福祉行政官育成プロジェクト 」運営指導調査団報告書
- プロジェクト関連資料（事業報告書、合同調整委員会議事録、短期専門家報告書、評価資料各種）

2）質問票による調査

タスクメンバー（20名）及びヤンゴンにおける手話研修の受講者（ろう者の家族、学校教員、政府関係者、社会福祉局、NGO等）（59名）からの質問票を回収し、結果を集計・分析した。

3）インタビューによる調査

社会福祉救済省、タスクメンバー、ファシリテーター及び研修受講者、手話教材を受け取ったろう者の家族に対し、インタビュー調査を実施した

4）プロジェクト関係者とのワークショップ・協議

日本人専門家、社会福祉救済省社会福祉局、タスクメンバーとの意見交換、協議を行った。協議の結果を踏まえて、日本側で作成した評価案の改定を行い、結果をミニッツに取りまとめた。また、評価結果に基づきPDM Ver.1及びPO改定案を作成した。

（3）調査・評価上の制約

特になし。

（4）評価のスコープ

本中間レビューにおいては、2007年2月7日に作成されたPDM Ver.0を基に、関係資料のレビューを通して評価グリッド（付属資料1.参照）を作成した。評価グリッドによって、評価項目の整理、測定可能な指標を追加すると同時に、上位目標、プロジェクト目標、成果の明確化（表１－１参照）を行い、各項目に関して評価を実施した。

表１－１　評価グリッドにおける上位目標、プロジェクト目標、成果

	PDM Ver.0（2007年2月）	評価グリッド	評価のポイント・理由等
上位目標	ヤンゴンとマンダレーにおいてろう者の社会参加が促進される。	ヤンゴンとマンダレーにおいてミャンマー手話が普及することで、ろう者の社会参加が促進される。	プロジェクトの活動はミャンマー手話の普及に資するものであり、その結果として一般市民のろう者に対する理解が向上することでろう者の社会参加が促進されると整理できる。
プロジェクト目標	社会福祉行政官とろう者コミュニティが共同で活動を計画・実施する協力関係が強化される。	社会福祉行政官とろう者コミュニティが共同でミャンマー手話を普及する体制が構築される。	行政官とろう者の共同活動の強化はプロジェクト実施上の手段であり、プロジェクトの活動は、手話の普及体制の構築を目的としている。
成果1	ろう者コミュニティが既存の標準手話教材語彙編を評価する能力を習得する。	タスクフォースがミャンマー手話教材及び手話研修を評価する技術を習得する。	現在、語彙編の評価能力向上にかかわる活動は実施されていない。語彙編に限定するものでなく、手話会話集、研修を含めた評価実施のための体制が構築されたか確認する。
成果2	ミャンマー手話会話集がろう者コミュニティの主導により作成される。	PDM Ver.0 どおり。	
成果3	ろう者とその家族、手話通訳候補者、ろう学校教師が標準手話を習得する。	タスクフォース、ファシリテーターがミャンマー手話会話集に基づき、手話指導の技術を習得する。	手話研修のみでは手話の習得は困難である。講師であるタスクフォース、ファシリテーターの手話研修を実施するための能力向上がなされたか確認する。
成果4	ろう者に関するコミュニティ（一般市民）の意識が向上する。	PDM Ver.0どおり。	

第２章　プロジェクトの実績と現状

２－１　投入の実績

２－１－１　日本側投入

プロジェクト開始以来、中間レビューまでの日本側投入は以下のとおりである。

（1）長期専門家派遣　1名（現職教員研修マネジメント）

1名の長期専門家（業務調整・研修計画）、短期専門家（標準教材評価、標準教材開発、標準手話教授法）及び短期専門家の現地業務にともなう手話通訳者が計画どおり派遣された。派遣専門家のリストは付属資料2.ミニッツANNEX5-1参照。

（2）研修員受入

2008年度に11名、2009年度には10名のタスクフォースに対して本邦研修が実施された。本邦研修受講者のリストは付属資料2.ミニッツANNEX5-2参照。

（3）機材供与

ヤンゴン、マンダレーにおけるプロジェクト事務所に対してPC、コピー機、デジタルカメラ、ビデオ、DVDプレーヤー等が供与された。

（4）在外事業強化費

プロジェクトの運営経費としてローカルコストの負担が行われた。

２－１－２　ミャンマー側投入

プロジェクト開始以来、中間レビューまでのミャンマー側投入は以下のとおりである。

（1）カウンターパートの配置

社会福祉局行政官及び、ヤンゴン及びマンダレーのろう学校長からのカウンターパート（5名）及びプロジェクトの実施主体として社会福祉局行政官、ヤンゴン及びマンダレーろう協会、ろう学校教員からのタスクフォース（20名）及びファシリテーター（12名）が配置された。カウンターパート及びタスクフォース、ファシリテーターのリストは付属資料2.ミニッツANNEX5-3参照。

（2）施設等の提供

プロジェクトに必要な施設として、社会福祉局ヤンゴン管区及びマンダレーろう学校内にプロジェクト事務所が提供されている。

２－２　成果の達成状況

本プロジェクトは、中間レビュー時点において、主要な活動目標を達成している。このような活動の実績が順調に達成した要因は、プロジェクトの活動主体であるタスクフォースのキャパシティ・ディベロップメントが効果的に行われたことにあると考察できる。また、活動の実績は以

下のとおりである。

成果（アウトプット）1：タスクフォースがミャンマー手話教材及び手話研修を評価する技術を習得する。

成果1は当初「ろう者コミュニティが既存の標準手話教材語彙編を評価する能力を習得する。」となっており、社会福祉局によって作成された標準手話教材語彙編を評価することで、その後の手話教材の作成に評価結果を反映させることが目的とされた。標準手話教材語彙編は、当事者であるろう者の意見が反映されておらず、ろう者から強い不満が聞かれた。しかし、既に政府から認証されており、同教材の評価・改定はなされないとの政府の意向により、標準手話教材語彙編の評価をめざした成果1に対する活動は実施されていない。

このような背景から評価グリッドにおいては語彙編の評価に限定することなく、プロジェクトで作成されたミャンマー手話会話集及び手話研修のモニタリング・評価実施能力にかかわる項目として評価を実施した。

プロジェクトで作成されたミャンマー手話会話集は2009年9月にミャンマー政府による承認が行われた。2009年11月に実施した本中間レビュー時点では、まだ一部の関係者に対してのみ手話会話集が配布されている状況であったため、会話集の評価は計画段階にあった。一方で2009年5月から開始されているミャンマー手話研修に関しては、タスクフォース評価シート、自己評価シート、参加者質問票といった評価ツールがプロジェクト内で開発されており、評価結果に基づき、評価レポートがまとめられ、タスクフォース・ミーティング内で評価結果が共有されている。

しかし、手話研修の評価ツールを用いたデータの集計、レポーティングについては、日本人専門家を中心に実施されていることからも、プロジェクト成果を継続的に発展させるためには、今後、これらの業務をタスクフォースに移管することが求められる。

成果（アウトプット）2：ミャンマー手話会話集がろう者コミュニティの主導により作成される。

（1）ミャンマー手話会話集作成の過程

本プロジェクトにより作成されたミャンマー手話会話集は、2009年9月にミャンマー政府により認証された。作成にあたっては、ヤンゴン、マンダレーから選出されたタスクフォースが中心となり、ミャンマー手話会話集に掲載する内容として、10のトピック[6]を選定した。その後、本邦研修及び短期専門家による技術移転により、会話集の作成にかかわる①手話の収録方法、②分析方法、③手話文法の記載方法等にかかわる知識、技術を習得した。短期専門家のインプットに加え、長期専門家の支援により会話集の具体的イメージが醸成されたことが報告されており、本邦研修、短期専門家、長期専門家といったプロジェクトのインプットが手話会話集作成に効果的に活用されている。

（2）タスクフォースのオーナーシップ

手話会話集作成の活動はタスクフォースの強いオーナーシップにより推進されたことが

[6] ミャンマー手話会話集は、①挨拶、②家族、③日常生活、④教育、⑤職業、⑥健康、⑦天気、⑧買物、⑨旅行、⑩趣味・スポーツといった10のトピックから構成されている。

確認された。このことを裏付けるデータとして、会話集作成にかかわる活動に対するタスクフォースの高い満足度が示されている。質問票による調査の結果、下記の表に示すように、ミャンマー会話集作成業務に対する満足度に関して、5段階評価[7]において平均4.8と高い数値を示している。さらに、今後も会話集作成・改定業務に参加したいと考えているといった質問に対しては平均4.9となり、タスクフォースの全メンバーが「そう思う、どちらかといえばそう思う」と回答している。

質問	平均
タスクメンバーとして会話集作成の業務に満足している	4.8
今後も会話集作成・改定業務に参加したいと考えている	4.9

インタビュー調査においても同様に、手話会話集作成に関してタスクフォースからの高い満足度を示すコメントがなされた。その主要な要因がマンダレーとヤンゴンで使用されている手話を当事者であるろう者自身が分析し、タスクフォース・ミーティングにおいて、会話集に記載する手話を選定し、合意するといったプロセスを踏んだことが業務への高い満足度につながったことが述べられている。

- 「マンダレー、ヤンゴンどちらの手話を採用するかで激しい議論になったが、結果として自分たちでつくったという充実感をもつことができた。」（タスクフォース、ろう者）
- 「マンダレー、ヤンゴンの中だけでも多くの手話がある。手話会話集はこれらを標準化して、ろう者同士のコミュニケーションを容易にすることに役立っている。」（タスクフォース、聴者）

（3）手話会話集作成にかかわる知識・技術

タスクフォースへの質問票の結果からは、5段階評価で平均4.7とタスクフォースの全員が、ミャンマー手話会話集の作成業務を通して、会話集を継続的に作成、改定するための能力を習得したと回答している。一方でタスクフォースの中には、今後、更に詳細な手話分析手法を習得したいといったニーズがあることが確認された。

質問	平均
会話集作成業務を通して、会話集作成にかかわる知識やスキルを身に付けた	4.7

手話会話集作成に関しては、ろう者が主体的に業務に参画し、聴者との連携により、手話会話集を作成するための能力を習得したといった、ろう者のエンパワーメントが促進されたことが指摘された。

[7] 5段階（5：そう思う、4：どちらかといえばそう思う、3：どちらでもない、2：どちらかといえばそう思わない、1：そう思わない）の質問票を作成し、タスクフォース（20名）に対して配布した。

・　「多くの作業がろう者により行われた。ろう者が自分たちで手話会話集を作成する能力を身に付けた。」（タスクフォース、聴者）

また、手話会話集作成にかかわる業務プロセスは同時に、タスクメンバーの手話への理解を深めることに貢献したことが以下のコメントから推定される。

・　「手話会話集を作成したことで、手話の文法が深く理解することができた。当初は音声言語を手話に翻訳していたが、短期専門家による研修、教材の作成を通して、音声言語との違いを認識することができた。」（タスクフォース、聴者）

（4）ミャンマー手話会話集の配布計画

社会福祉局は作成されたミャンマー手話会話集を手話研修の参加者、病院、学校等に対して配布する計画を有している。1万部の手話会話集、3,000部のDVD、2,000部のVCD（ビデオCD）がプロジェクトにより作成された。会話集に加えてDVD、VCDといったマルチメディア教材をセットで配布することで効果的な手話普及が期待される。

成果（アウトプット）3：タスクフォース、ファシリテーターがミャンマー手話教材に基づき手話指導の技術を習得する。

（1）ミャンマー手話研修実施にかかわる知識・技術

タスクフォース、ファシリテーターのろう者が講師となりミャンマー手話研修が実施されている。研修参加者への質問票の結果、講師の知識、使用教材の質に関しては、5段階評価で平均4.7と講師には研修を行うために十分な知識があり、更に研修で使用された教材も分かりやすいものであったことが確認された。

質問	平均
講師は研修に必要な知識を十分にもっていた	4.7
講師の用意した教材は分かりやすかった	4.7

次のタスクフォースのコメントからも、本邦研修及び短期専門家による技術指導が手話指導の技術の向上に貢献していることが分かる。

・　「手話に関する知識が増えることによって、初めて分かりやすく教えることができるようになった。」（タスクフォース、ろう者）

・　「プロジェクトで学んだ教授法について試してみる。自分でいろいろな方法を試すことが重要だと感じている。」（タスクフォース、ろう者）

また、タスクフォース・ミーティング等の機会を利用してお互いの教授法を評価し、評価結果を手話研修へフィードバックする活動が行われていることからも、継続的な手話指導技術の向上が図られていることが確認された。

・　「タスクミーティングなどの議論を通して、自らが発展していく必要性を感じている。

（ミーティングによる反省会は）自分に足りないことを知るチャンス。」（タスクフォース、ろう者）

・ 「受講生からのアンケート結果を見てがっかりすることもあるが、研修を良くしていくために活用したいと思っている。」（タスクフォース、ろう者）

（2）ミャンマー手話研修参加者

ミャンマー手話研修が2009年5月からヤンゴンとマンダレーで実施され、2009年11月の中間レビュー時点で参加人数が835名となった。募集は社会福祉局及びろう学校等によるものであるが、自発的な参加者がほとんどであり、継続的な研修への参加を希望している。このことからもタスクフォース及びファシリテーターが、参加者が満足するだけの高い質の研修を実施するための能力を習得していることが推察できる。

ミャンマー手話研修参加者の内訳は表２－１に示すとおり。

表２－１　ミャンマー手話研修参加者及びその内訳

研修実施場所	ろう児の家族	一般教員	ろう学校教員	政府関係者	社会福祉局職員	NGO	その他	計
マンダレー	15	11	2	69	20	49	43	209
ヤンゴン	15	0	7	400	29	1	29	481
タスクミーティング	32	13	8	0	50	7	35	145
計	62	24	17	469	99	57	107	835

成果（アウトプット）4：ろう者に関するコミュニティ（一般市民）の意識が向上する。

（1）ミャンマー手話研修普及計画

他の管区及び州[8]でのミャンマー手話研修実施によるろう者への意識向上のための啓発は、残りのプロジェクト期間での活動となる。成果4の活動計画として、社会福祉局のオーナーシップの下、他の管区・州において最低1回（数日間）の手話研修の実施が検討されている。普及に際して、中央において普及のための運営委員会を組織すると同時に、各管区・州の社会福祉局の行政官に対する手話研修マネジメントに関するセミナーの実施が計画されている。

（2）ろう者に関する意識の向上

ヤンゴン、マンダレーにおける手話研修の参加者への質問票では、研修参加者のろう者への理解度に関する回答が5段階評価で平均4.5となり、手話研修の受講がろう者への理解の向上に寄与することが確認された。このことからも、手話研修が他の管区・州で実施された場合の成果4の将来的な達成の可能性は高いと判断される。

[8] ミャンマーは7つの管区と7つの州から成る。それぞれの地域の居住状況は、管区はビルマ族、州は少数民族が多数を占めている。

質問	平均
研修の受講により、ろう者への理解が深まった	4.5

手話研修の受講による一般市民のろう者へ理解の向上の要因として、研修の講師を当事者であるろう者が主体として実施していることが述べられている。

・ 「手話研修の参加者はろう者が教えているということに関心を寄せて参加してくることが多い。ろう者による研修を受けるだけでもろう者に対する認識が変わる。」（タスクフォース、聴者）

２－３　プロジェクト目標の達成見込み

プロジェクト目標：社会福祉行政官とろう者コミュニティが共同でミャンマー手話を普及する体制が構築される。

本プロジェクトは、社会福祉行政官及びろう者コミュニティから選定されたタスクフォース及びファシリテーターのメンバーの効果的な連携が確認された。また、手話会話集のユーザー、手話研修への参加者の満足度も高いことからも、手話の普及に向けた体制が整備されつつあるといえる。

(1) 社会福祉行政官とろう者コミュニティが共同で実施した活動

ミャンマー手話会話集の作成に際しては、聴者が会話集のインデックス、文章作成等のミャンマー語に関する業務を中心に行い、ろう者が分析作業、写真撮影、挿絵などの手話に関する業務を担当するといった業務分担が行われた。また、手話研修の際に、聴者が手話についての一般的な説明を行い、ろう者が講師となって手話を指導するといった連携が行われている。

このようなろう者、聴者からなる関係者間の連携による活動が円滑に実施されている背景には、タスクフォース業務を通じて、タスクフォースのメンバーがお互いを理解し、社会福祉局の職員がろう者の意見を尊重するようになり、ろう者、聴者間で自由に意見交換ができるようになったことで、ろう者のオーナーシップが向上したことがコメントされている。

・ 「ろう者はわがままな性格だと思っていたが、ろう者を理解することで、このような誤解が解けていった。」（タスクフォース、聴者）
・ 「聴者を他の民族のように感じていたが、タスクフォースの業務を通して親しみを感じることができた。」（タスクフォース、ろう者）
・ 「聴者への意識が変わった、プロジェクトに参加する以前は、聴者はろう者を見下していると感じていた。タスクメンバーとしての活動を通して、それは聴者がろう者について知らないためであることが分かった。」（タスクフォース、ろう者）

(2) ミャンマー手話会話集ユーザーの満足度

ミャンマー手話会話集のユーザーからの評価に関しては、前述のとおり、手話会話集の配布が今後計画されているため、測定可能なデータはない。一方、既に手話会話集を受け取っ

た一部のろう児の家族等からは、会話集は使い勝手がよく、理解しやすいといった意見が述べられている。

・ 「プロジェクトで作成された手話会話集はとても分かりやすい。子どもが使っている手話と異なる点があり、ミャンマーの標準手話として、新たに勉強したいと思っている。また、教材を手にすることで手話への関心が高まった。」（ろう児の家族）
・ 「NGOスタッフとして、メアリー・チャップマンろう学校でマッサージを教えているが、マッサージ技術を指導するうえでも、ろう児と顧客とのコミュニケーションにも手話会話集、特に人体に関する手話表現が役に立っている。」（NGOスタッフ）

これらの手話会話集ユーザーのコメントからも、今後、会話集が全国に配布された場合、ユーザーからの高い評価が期待される。

（3）ミャンマー手話研修の参加者の満足度

ヤンゴンにおけるミャンマー手話研修の参加者への質問票の結果からも、参加者の満足度は非常に高く、研修への継続的な受講への意向が確認された。

質問	平均
研修は全体的に満足できるものであった	4.4
今後も研修を継続的に受講したいと考えている	4.5

手話研修は、特にろう者とのコミュニケーションの必要性が高いろう児の家族やろう児を受け入れている一般校教員、ソーシャルワーカーからのニーズが高いことがタスクフォースのコメントからも分かる。

・ 「手話研修参加者には、ろう者とのコミュニケーションが取れないことに困っている参加者が多い、特にろう児の親からのニーズが高い。」（タスクフォース、聴者）
・ 「高校の教員5名のグループで手話研修を継続して受講している。手話を学ぶことでろう児との会話ができるようになった。」（一般校教員）
・ 「以前は、ろう者の子どもを学校に送り届けるだけで、ろう者、聴者は別の世界をもっていた。手話研修により、聴者がろう者の世界に溶け込むことができた。また、研修の参加によりろう者の親の連携がつくれた。」（ろう児の家族）

（4）ミャンマー手話研修参加者の理解度

ミャンマー手話研修には直接教授法の中のひとつであるナチュラル・アプローチ（Natural Approach：NA）[9]が用いられている。参加者への質問票の結果によると、講師の指導に対する参加者の理解度は5段階評価で平均4.1であることからも、ナチュラル・アプローチによる教授法を用いた手話研修は効果的に実践されているといえる。

[9] 目的言語をその言語だけで教える方法のひとつ。学習に際して、「目標言語の発出」よりも「目標言語の理解力」を醸成することを先行して指導し、その後「発出」を指導していく方法。

質問	平均
手話研修における講師の指導は理解できたか	4.1

研修でろう者が手話を教えることに関する利点をタスクフォースが的確に理解しており、研修がろう者主体で効果的に実施されていることが下記のコメントから読み取れる。

- 「ろう者が手話を教えることはとても有効であると感じている。聴者が教えるとろう者の手話との違いが生じる。」（タスクフォース、聴者）
- 「ろう者（手話のネイティブ）が教えることで、受講生の手話のレベルを正確に判断することができる。」（タスクフォース、ろう者）

２－４　上位目標達成の見通し

上位目標：ヤンゴンとマンダレーにおいてミャンマー手話が普及することで、ろう者の社会参加が促進される。

プロジェクト中間レビュー時点において、マンダレー及びヤンゴンでの手話研修参加者の満足度、手話への理解度、ろう者への理解が向上していることが確認された。ミャンマー手話研修が他の地域において普及されることにより、これらの地域においても同様に高い成果が発現することが期待される。また、プロジェクトの活動を通したろう者のエンパワーメントにより、ろう者の社会参加が確実に推進されていることが、社会福祉局職員のコメントに述べられている。

- 「ミャンマーでは障害者支援を積極的に行っているが、ろう者への支援は遅れている。ミャンマーの障害者支援団体であるMyanmar Disable People Organization （MDPO）の代表者の多くが盲者であることからMDPOの総会にろう者が出席することがなかった。しかし、今年（2009年）から初めてろう者が出席することとなり、ろう者がプロジェクトを通して自信を付けていったことを感じている。」（社会福祉局職員）

このことからも、プロジェクト終了後、手話の普及が社会福祉局の主導で継続された場合、上位目標が達成される見込みが高い。

２－５　プロジェクト実施体制

本プロジェクトのミャンマー側カウンターパート機関は、社会福祉救済省社会福祉局であり、社会福祉局長を合同調整委員会（Joint Coordination Committee ：JCC）委員長、副局長をJCC副委員長兼、プロジェクト・ダイレクター、社会福祉局リハビリテーション課長をプロジェクト・マネジャーとしている。

（1）JCCメンバー

- 委員長：社会福祉局局長（Director General）
- 副委員長：社会福祉局副局長（Deputy Director General）
- 委員：社会福祉局（マンダレーろう学校、マンダレー管区を含む）、ろう者組織（ヤンゴン、マンダレー）、メアリー・チャップマンろう学校の代表者

(2) カウンターパート

・プロジェクト・ディレクター：社会福祉局副局長
・プロジェクト・マネジャー：社会福祉局リハビリテーション課長
・リハビリテーション課副課長
・マンダレーろう学校校長
・社会福祉局マンダレー支部副支部長
・メアリー・チャップマンろう学校校長

(3) タスクフォース、ファシリテーター

実際のプロジェクト活動を推進するタスクフォースが社会福祉局職員、ろう学校教員、ろう協会会員の計20名をメンバーとして、マンダレー、ヤンゴン双方に組織されている。また、タスクフォースの業務、特に手話研修の実施を補佐する役割として、ファシリテーターがろう学校教員、ろう協会会員の計12名をメンバーとして組織されている。

(4) プロジェクトサイト

本プロジェクトは公立のろう学校[10]が所在するマンダレーを拠点として実施されているが、プロジェクトサイトはマンダレー及びヤンゴンであり、タスクフォース・ミーティング、手話研修といった活動は双方で実施されている。したがって、マンダレー、ヤンゴン双方にプロジェクト事務所があり、それぞれに1名の支援スタッフが常駐している。

以下の図２－１に本プロジェクトの実施体制図を示す。

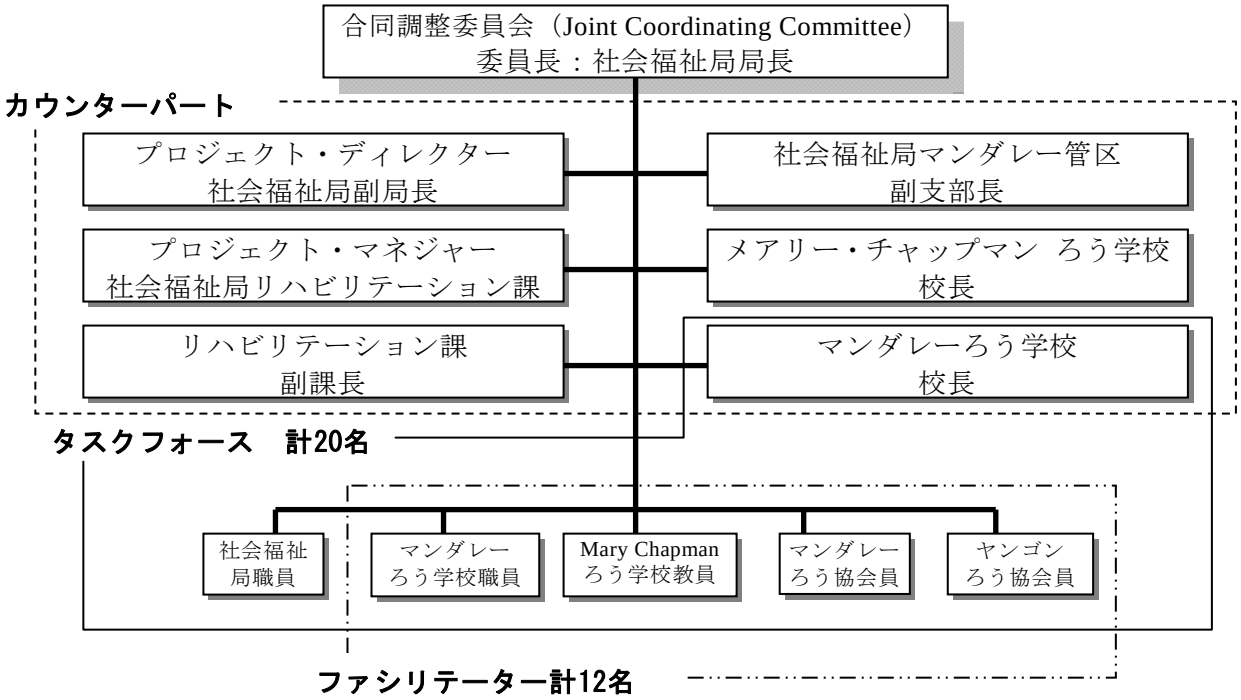

図２－１　プロジェクトの実施体制

[10] ヤンゴンに所在するメアリー・チャップマンろう学校はNGOにより運営されている。

２－６　実施プロセスの状況

本プロジェクトは中間レビュー時点において、主要な活動を終了している。一方で社会福祉局及びタスクフォースメンバーの意向から、管区・州レベルでのミャンマー手話研修の実施が成果4として、今後、計画されている。このようにプロジェクトの活動が順調に進捗し、プロジェクト効果の普及に関する計画が策定された要因としては、プロジェクトがミャンマー側関係者のオーナーシップの醸成に成功したことにあると考えられる。

活動のリソースパーソンであるタスクフォースの中でも当事者であるろう者のエンパワーメントが促進されたことを要因として、関係者のオーナーシップの醸成が行われた。案件形成段階において、普及し得るミャンマー手話を策定するためには、まず、手話の「ユーザー」であるろう者を活動の中心に据えることが強調された。これに対して、当初、社会福祉局及びろう学校関係者より、「ミャンマーではろう者だけでは活動ができない」「ろう者には十分な能力がない」といった意見があったが、実施段階においてタスクフォースとして、過半数以上のろう者が選出され、多くの活動がろう者を中心に実施されたことで、ろう者のエンパワーメントが促進された。プロジェクトが一貫してこの方針を実行したことにより、聴者のメンバーのろう者への意識の向上が図られたことがプロジェクトの活動における聴者、ろう者の連携強化につながったと考えられる。このことはタスクフォースの主要メンバーからのコメントにも示されている。

- 「プロジェクトの計画段階から参加し、ろう者を中心とした活動に関して当初危惧していたが、タスクメンバーのキャパシティービルディングが確実に進み、成功している。」（タスクフォース、聴者）
- 「日本ではろう者が手話を教えていることにとても驚いた。環境が整えばろう者が自立して社会に参加できることを知り、希望をもてるようになった。」（タスクフォース、ろう者）

また、ろう者のエンパワーメントには、本邦研修及び短期専門家派遣に加え、研修後の活動を長期専門家がフォローするアプローチが採られている。ろう者のタスクフォースが実際にろうの日本人専門家が講師を行う研修に参加することにより、ろう者としての自己肯定、アイデンティティの確認につながっている。これに関して、本邦研修及び短専門家による研修を受講したろう者のタスクフォースは以下のようにコメントしている。

- 「ろう者が手話を教えていることを日本に行ったタスクメンバーから聞いても信じられなかった。実際にろう者の短期専門家の方々に知り合うことで、ろう者にもできるといった確信がもてた。」（タスクフォース、ろう者）
- 「手話がひとつの言語であるといった認識が生まれることで、ろう者が自分たちの言語を普及しようといったやる気につながったと感じる。」（タスクフォース、ろう者）

第３章　中間レビュー結果

３－１　妥当性：高い

本プロジェクトは、下記に示すように、国家政策との整合があり、一般市民からのニーズも高いことから妥当性は高いといえる。

（1）ミャンマーの国家政策との整合性

近年、ミャンマー全国で聴覚障害を含む障害者にかかわる調査が実施され、人口の2.3%が障害者であり、その対応が検討された。このような状況を受けて、2008年には、政府による障害者支援にかかわる国家法令が制定された。現在は社会福祉政策（2010～2012年）に基づいた支援が実施されており、ろう者への支援も同政策の中に含まれている。また、2010年には新たな社会福祉政策の5カ年計画の策定が計画されているが、本プロジェクトの支援内容を反映した内容にしたいとの意向が示されている。

（2）日本の援助政策との整合性

ミャンマー国別事業実施計画において、本プロジェクトを含む「障害者支援プログラム」は開発課題「社会的弱者を取り巻く社会環境の改善」の下に位置づけられている。「障害者支援の芽を育てる拠点づくり」を目的とした本プロジェクトは日本側の援助政策と合致する。

（3）日本の技術の優位性

わが国は、手話通訳の養成、メディアによる啓発活動にも豊富な実績を有しており、プロジェクト・デザインにおいてこれらの経験が有効に反映されている。

また、アジア太平洋障害者センター（APCD）[11]の専門家の派遣などが行われた経緯もあり、JICAの障害者支援にかかわる類似プロジェクトの知見も効果的に活用されている。

（4）ターゲットグループのニーズとの整合性

作成された手話会話集はヤンゴン、マンダレー双方のろう者コミュニティが中心となり作成した手話教材として、関係者から高い評価を得ている。ヤンゴン、マンダレーに限らずミャンマー国内で異なる手話が使用されていることから、標準手話としてのミャンマー手話会話集への高いニーズが確認された。また、プロジェクトにより2009年5月から開始された手話研修は既に835名が自主的に参加している。質問票の結果からは、研修参加者のうち93%が研修に満足しており、また、90%が今後も研修に参加したいと回答している。プロジェクト開始前にはろう者による手話研修の実施はなく、特にろう児の親、ろう児を受け入れている一般学校の教師、ソーシャルワーカーなど、ろう者との接する機会の多い参加者から手話研修への高いニーズと評価が確認された。

[11] アジア太平洋障害者センター（Asia-Pacific Development Center on Disability： APCD）プロジェクトは2002年に開始され、各国政府及びNGOと広くネットワークを構築することで、障害者自身による障害者のエンパワーメントの実現をめざしている。

(5) 課題の解決手段としてのアプローチの妥当性

プロジェクトの最終的な目標であるろう者の社会参加の促進には、ろう者という障害者の存在や、ろう者固有のニーズや文化といった、一般市民のろう者に対する正確な理解が不可欠となる。本プロジェクトの開始時は政府やろう学校関係者からも「ろう者主体の活動は困難である」「ろう者には能力が不足している」といった発言もあった。このような状況に対して、プロジェクトはろう者のエンパワーメントを通して、一般市民のろう者への理解の向上を図ることで、ろう者の社会参加を促進するものであり、プロジェクトは有効な戦略を有している。

３－２　有効性：高い

本プロジェクトの成果はいずれもプロジェクト目標である「社会福祉行政官とろう者コミュニティが共同でミャンマー手話を普及する体制を構築する。」に貢献しており、有効性は高い。現時点で4つの成果のうち、3つの成果はほぼ達成されている。成果4は、他の管区・州における手話研修の普及が今後計画されており、現時点で成果を測定するデータはないものの、社会福祉局の同活動に対する高いオーナーシップが確認されていることからも、プロジェクト期間内での達成が見込まれる。

なお、プロジェクト目標達成に対する促進要因としては、活動の主体となるタスクフォース及びファシリテーターの能力が向上したことが挙げられる。特に、手話会話集の作成、手話研修の実施を通して、当事者であるろう者のエンパワーメントが効果的に行われたことにより、聴者のろう者に対する意識が向上し、結果的に聴者、ろう者間での連携の強化につながった。また、質問票による調査結果においても、タスクフォースのすべてのメンバーが会話集作成、研修実施のための知識・技術を習得したと回答している。

３－３　効率性：高い

短期専門家、本邦研修はプロジェクト活動の進捗にあわせて、計画どおりに実施され、量、質、タイミングともに適切であり、成果発現に貢献している。聞き取り調査の結果からも、日本人長期専門家がミャンマー側プロジェクト関係者から高い信頼を得ていることが確認された。専門家はミャンマー手話を習得しており、高いコミュニケーションスキルにより社会福祉局 、タスクフォース、ファシリテーターとの良好な関係を築くと同時に、彼らのオーナーシップの醸成を図り効率的なプロジェクト運営に大きく貢献している。

タスクフォース、ファシリテーターのメンバーは社会福祉局職員及びろう学校を含む既存のろう者コミュニティのメンバーから選出されている。タスクフォースの活動は自主性に任されておりプロジェクト運営経費を最小限に抑えることを実現している。他方、手話研修の実施などはマンダレー、ヤンゴン双方のろう学校が利用されており、新規施設建設を行うことなく、現地リソースを活用した効率的なプロジェクト運営が行われている。

また、本プロジェクトの案件形成過程ではAPCDの日本人専門家の側面支援が実施された。今後、啓発活動にかかわる計画策定に際して、APCDからの第三国専門家の派遣が検討されており、他のプロジェクトのネットワークが効果的に活用されている。

３－４　インパクト：高い

本プロジェクトは、上位目標の達成可能性も高く、プロジェクト関係者以外への波及効果も確認されていることからインパクトは高いと判断される。

(1) 上位目標の達成見込み

上位目標には「ろう者の社会参加促進のためのミャンマー手話の普及」が計画されている。ミャンマー政府は、ヤンゴン、マンダレーでの手話研修の効果が認められたことで、ミャンマー手話研修の他地域での実施計画を策定するなど、手話普及に対してオーナーシップをもって取り組んでいる。また、ろう者の社会参加促進のためには、一般市民のろう者への理解が必要となる。ヤンゴンにおける手話研修参加者を対象にした質問票では、90%の参加者が研修の受講により、ろう者への理解が深まったと回答していることからも、手話研修が全国で実施されることにより、上位目標が達成される可能性は高い。

(2) プロジェクト関係者以外への波及効果

タスクフォースのろう学校教員が他の新任教員及びろう児の親に対して手話を教える際に、プロジェクトにより習得した手話文法、教授法が役に立ったことが報告されている。また、タスクフォースのろう協会会員が他の会員に対して手話文法、教授法に関する知識を共有していることが確認された。このことからも直接のプロジェクト関係者ではないろう学校の教員、ろう児の親、ろう協会会員等の手話に関する知識・技術の向上にも寄与していることが推察される。

さらに、短期専門家の派遣に付随する日本からの手話通訳者のプロジェクトへのかかわりにより、ろう学校教員が中心となっているミャンマー側の手話通訳の態度に改善がみられるようになった。これはろう者の自由な発言を促進し、同時にろう者と聴者間のコミュニケーションの向上に貢献しており、プロジェクトの円滑な実施のみならず、ろう者の社会参加に寄与している。

３－５　自立発展性：中程度

プロジェクトの成果が自立発展的なものとなるためには組織面、財政面、技術面において更なる努力が必要となる。

(1) 政策面

社会福祉局はミャンマー手話の普及に力を入れており、その取り組みをプロジェクト開始以前から行っている。2008年には国家法令において、政府による障害者支援の実施が制定された。現在は社会福祉政策（2010～2012年）に基づいた支援が実施されており、ろう者への支援も同政策の中に包含されている。2010年には新たな計画が策定される計画となっており、本プロジェクトの活動を計画に反映したいといった意向が確認されていることからも、政策的支援が継続される可能性は高い。

(2) 組織面

社会福祉局は積極的にプロジェクトを支援しており、高いオーナーシップが確認された。

プロジェクトで策定されたミャンマー手話の普及に関して、他管区・州の社会福祉局を取り込んだ普及計画を策定していることは、社会福祉局のプロジェクトへの長期的なコミットメントを示すものであるといえる。プロジェクトを通して、社会福祉局がプロジェクト管理、組織形成等に関する能力を向上させたことが報告され、今後、他の障害者支援へのプロジェクトの経験の活用が示唆されている。

一方、タスクフォースはろう者のエンパワーメントにより、聴者及びろう者間の信頼関係が向上し、良好な連携体制が生まれている。タスクフォースは今後の手話の普及に関して高いオーナーシップをもって活動に取り組んでいることからも、組織面での自立発展性は高いといえる。他方、現状ではファシリテーターはタスクフォースメンバーに比較すると手話指導力がやや低いことなどから手話指導の場が限定されていることに対する不満の声がある。ミャンマー手話を他地域へ普及する際には、ファシリテーターの役割を明確化させ、タスクフォース同様に研修機会を提供することで能力強化を行う必要がある。

(3) 財政面

現在、ミャンマー政府側負担としては、ヤンゴン、マンダレーでのプロジェクト事務所及び光熱費のみとなっている。社会福祉局においてはろう者支援に特化した予算項目はなく、女性、障害者等社会的弱者支援予算として配賦されている予算より支出される。一方でタスクフォース及びファシリテーターは本来業務ではなく、ボランティアとしてプロジェクト活動に参画している。プロジェクトの主要な活動経費はタスクフォース・ミーティングの際の日当、交通費などに限定されていることからも、プロジェクト終了後のミャンマー政府による活動経費の確保は可能であることが想定される。

(4) 技術面

手話会話集、手話研修は会話集の受領者及び研修参加者から高い評価を受けている。これはプロジェクトの主体となっているタスクフォースの能力の向上を示すものであり、継続的な手話の普及の促進が期待される。しかし、標準的な手話会話集に関しては、一度作成したらそれをずっと使用するのではなく、一定の期間で見直しを行い適宜改訂する必要がある[12]など、プロジェクトを継続的に発展させるためには、プロジェクト効果のモニタリング、フィードバックの実施が必要となる。これまで、手話研修に対するモニタリング・評価については日本人専門家により実施されていることからも、今後、タスクフォース内から、担当者を選出し、専門家のモニタリング・評価にかかわる業務を移管することで、プロジェクトの自立発展性が向上することが期待される。

３－６　結論

本プロジェクトはミャンマー手話の普及のために必要となる、人的資源の開発に大いに貢献している。中間レビュー時点において多くの成果が達成されており、プロジェクト目標の達成可能性も高いことが想定される。このように活動が順調に実施されてきた背景にはプロジェクト活動を通して、ろう者のエンパワーメントが促進され、それに伴い聴者の意識改革によるろう者、聴

12 運営指導調査時の森、宮本専門家による指摘。

者間の連携体制が強化されたことが要因として挙げられる。また、5項目評価を通じても高い評価結果となっており、残りのプロジェクト期間で自立発展性の向上を図ることにより、更に大きな効果が期待できる。

第４章　提言と今後の協力方針

４－１　提言

(1) ミャンマー手話の全国への普及に関する計画の策定

現在、ヤンゴン及びマンダレーにおいて、プロジェクトの成果は予定どおり達成される見込みである。このプロジェクトの成果については、残りの協力期間内にミャンマーの他の管区・州にまで広げることが想定されている。この普及については、対象地域の広がりとともに、各管区・州の社会福祉局職員等の関係者も増えてくることから、そのターゲット（対象地域、参加者、内容と頻度）を明確にしてより実行可能性のある計画を早急に策定する必要がある。

(2) ファシリテーターの役割の確認と活用

ファシリテーターについては、手話教授に係る知識・技術を習得しているものの、その知識・技術を発揮できる場が非常に限られているのが現状である。今後、ミャンマー手話を普及させていくに際して、このファシリテーターの活用はより重要になってくると思われる。ファシリテーターの役割と責任を明確にしつつ、ファシリテーターに対するトレーニングの機会等をより積極的に提供していくことが望まれる。

(3) 短期専門家の派遣期間の延長

中間レビューの結果、本邦研修や短期専門家による指導はプロジェクトの推進に大きな役割を果たしていることが示された。しかしながら、それぞれの投入期間が短いことで、その成果が限られたものになっていると思われる。現行の専門家派遣期間（約2週間）では、講師からのインプットだけに終始することになる傾向がある。受講者からの理解度の確認・評価を行いつつ、更なる知識の定着を図る試みが加わることによってより高い成果を達成することができると思われる。また、JICA-Netを活用した支援等のフォローアップ活動についても検討することが望ましい。

(4) タスクフォースによる手話会話集・手話研修に対するモニタリング・評価の実施

現在、手話研修に対するモニタリング・評価については日本人専門家を中心に実施されている。プロジェクト成果を継続的に発展させるためには、これらのモニタリング・評価についてもタスクフォースが実施できるようになることが必要である。残りの協力期間において、タスクフォースメンバーの能力向上を図っていくための活動の実施が望まれる。

４－２　プロジェクト計画の見直し（PDM_1）

プロジェクト開始当初に承認されたPDM Ver.0は、その後のプロジェクトの進行及び今回の中間レビューの結果を踏まえ、指標の再設定及び、その指標に合わせたプロジェクト目標、上位目標、成果の記載内容について、現実に即した形での変更が望ましいと判断された。見直しの結果を踏まえて、PDM_1（案）（付属資料2.ミニッツANNEX2参照）を策定した。PDM_1（案）は、プロジェクト関係者との協議を踏まえて、次回のJCCにおいて合意・決定される予定である。改定の主なポイントは付属資料3.参照。

４－３　今後の協力方針

本プロジェクトは、既存のろう者コミュニティのエンパワーメントを通して、短期間で成果を上げた。この成果を生かして、今後、ミャンマー手話の他地域への普及及び研修効果のモニタリング・評価及びその結果の反映などプロジェクト活動の自立発展性に資する活動により、残されたプロジェクト期間を有効に活用して、更なる成果を上げることが望まれる。現在、ヤンゴン、マンダレーでの活動を通じて手話を普及するための体制が整備されつつある。しかし、全国的な普及には更なる時間が必要である。したがって、プロジェクト後半では、プロジェクトの延長もしくは第2フェーズを見据えた活動が望まれる。

第５章　団員所感

５－１　森　壮也　団員（手話教授法）

2009年12月2日より7日まで大変に短い期間であるが、ミャンマーにおける標記プロジェクトの中間評価ミッションに参加した。実際の現地での行動日程は、移動時間もあったことから、以下の4日間のみである。

12月3日　ヤンゴン・JICAミャンマー事務所にて打合せ
12月4日　ヤンゴン・メリー・チャップマンろう学校訪問・タスクフォースの指導状況見学
12月5日　ヤンゴン　ワークショップ
12月6日　ヤンゴン　ワークショップ

JICAミャンマー事務所での打合せでは、コンサルタントの伊藤氏からそれまでのヒアリング等による中間評価についてのプレゼンを頂き、予想以上に大変に良い成果が上がっていることを伺って、立ち上げの調査ミッションの際からかかわってきた一人として大変に嬉しく思った。アジアの他の途上国と比しても、障害当事者団体もまだ成立しておらず、手話についても国内のろう者の間の相互交流がほとんどないためにろう学校ごとに手話が異なっているという大きな問題を抱えたなかでのスタートであったため、どれだけの成果を上げることができるのか、当初は大変に案じていた。しかしながら、長期専門家の小川氏の精力的な努力をはじめとして、日本からの専門家、そして何より現地のタスクフォースの皆さんの頑張りによって、会話テキストとDVDというアジアの他の国ではほとんど例のない教材を政府と協力して出せたことの意義は大変に大きい。

残る1年間でどのような成果を上げていくか、これが最大の問題であったが、メリー・チャップマンろう学校での指導ワークショップを見学した限りでは、これまた驚かされることになった。というのは、手話の指導技術の初歩をマスターされたタスクフォースメンバーによる自信をもった指導はもちろんのことであるが、指導後のタスクフォースメンバー相互による学校教育における『授業研究』に相当するディスカッションの様子はわずか2年前にスタートしたプロジェクトとは思えない人材の育成という意味で大きな感銘を覚えるものであった。

ネイティブ・スピーカーやネイティブ・サイナーが自分の言語について指導をする際には、必須となるのは、自分たちの言語について客観的にこれをとらえるというメタ言語能力である。タスクフォースメンバー、特にろう当事者のメンバーは、もちろんミャンマー手話のネイティブとして、ミャンマー手話を自然に使いこなしていたが、それに対するメタ言語知識はほとんど皆無であった。（音声）ミャンマー語との相違をきちんと客観的に述べていくという対照言語学的な方法論の萌芽、ミャンマー手話の初歩的学習者の相手の立場に立った段階的指導、講師相互の間での指導の工夫についての指摘と指摘された内容を受け入れる度量など、いずれも最初の調査ミッション、また最初の短期専門家としてのミャンマー訪問の時点では、まだ育っていなかったものである。これらがいずれもプロジェクトの活動を通じて育ってきている。加えて、手話を言語としてみる従来とは異なる視点（米国手話についての同様のパラダイム・シフトは、C.パッデン/T.ハンフリーズ著『「ろう文化」案内』晶文社、2003年、第5章「手話への新しい理解」で具体的に述べられている）が着実にタスクフォースメンバーの中で育ってきていることもうかがわせる議

論を目にすることができた。こうした変化は、手話についての（ジェスチャーの延長ではなく、音声言語と同等の独立した言語であるという）正しい理解を広めていくために2年前には、お互いが手話の違いを主張しあうばかりであったが、現在は、その違いを互いに認め合い、調整の方向を探ろうとする動きがろう者自身の側から出てきているようであったのも嬉しい発見である。このタスクフォースメンバーによる講義ワークショップのあとの議論のレベルも非常に高く、日本のプロの講師陣の議論には、まだ及ばないものの、一般のろう者の水準ははるかに上回っていたことも嬉しい成果である。

後半2日間のワークショップでは、政府社会福祉局担当者からの高い評価と期待が寄せられただけでなく、コンサルタントの伊藤氏からのタスクフォースメンバー、政府側への中間評価の説明にミャンマー側も大変に満足している様子がうかがわれ、プロジェクトの前半の成果が上がっていることを全員で共有できたことは、大変に良かったと思う。一方で、2グループに分かれてのセッションでは、セッション運営の方法についての手順がうまく伝わらなかったこともあり、一時議論の内容がミャンマー語での表記を巡る、ろう者の側ではフォローしきれないものとなり、ろう当事者というよりは、聴者の教師のリードが目立ってしまった側面もあったのが残念である。

またワークショップの最後の時間には、全日本ろうあ連盟河原理事と当方による、ろう教育とトータル・コミュニケーション、バイリンガル教育についての、プレゼンテーションを行った。これについては、歴史的な展開と日本の現状についての理解を得ていただくことを主眼点としたが、おおよその目的は達成できたように思われる。一方で、このプレゼンテーションの過程で、ミャンマーでは、トータル・コミュニケーションもバイリンガル教育もまだ新しい概念であるため、手話の語彙で両者の区別がまだ明確ではない状況が明らかとなった。このため、質疑応答の時間を通じて、トータル・コミュニケーションとバイリンガル教育についての具体的な説明に時間をかけたつもりであるが、どれだけ十分に理解がいきわたったか、やや不安もある。視覚的なプレゼン素材など、もう少し準備と工夫のために時間が割ければよかったと反省する次第である。

最後に今後のプロジェクトの展開と方向について、若干の所感を記しておく。本プロジェクトでは、テキストとDVD、及び人材の育成という3つの成果が上がっていることはこれまで書いたとおりである。一方で、最後の人材の育成については、タスクフォースに加えて現在、ファシリテーターという次のグループの育成に力が注がれているところである。しかし、タスクフォースメンバーは、元々、リーダー的な素質をもった人材が比較的多かったため、飲み込みなども早かったが、それでも2年以上かかっており、現在もまだ皆さん、学習を続けておられる状況である。日本においてもこうした手話講師の養成には、10年近くの歳月をかけており、それは、勤勉なミャンマーの人材をもってしても同様と思われる。このため、今後、タスクフォースメンバーの学習・研鑽を支援する体制と彼らが更にファシリテーターに指導ができるような環境の整備が必須となってこよう。

特にミャンマー全国での手話の普及ということを考えると、これだけの人材ではあまりに不足である。このため、今後の1年間では、試験的にできるところまで各州でまず実施していただくことと、マンダレーとヤンゴンでの集中的な研修ワークショップの実施によるOJT的な訓練の場の提供が鍵となってくると思われる。

ろう者の状況改善という意味では、もうひとつ手話通訳の養成という大きな課題があるが、こちらについてもただいたずらにこれを急ぐことなく、一方で、きちんとしたろうの手話指導講師の育成の継続、手話翻訳・通訳を指導できるバイリンガルの人材の育成のための枠組みの検討が

必要になってくる。日本においてもこの両方の育成は、非常に注意深くなされなければならないことは歴史が教えてきており、ミャンマーにおいてどのような形が望ましいのか、途上国ゆえのさまざまな資源制約と日本から投入できる技術協力とをうまくコーディネートした次の戦略が望まれる。

５－２　河原　雅浩　団員（ろう者のエンパワーメント）

（1）プロジェクトについて

模擬手話講習会では、ろう者が絵カードや図などを使って受講生とコミュニケートしながら教えていた。その指導法も、十分に訓練されており、スムーズなものであった。

終了後の反省会では、皆がお互いに自分の意見を述べ、建設的で活発な討議が行われていた。

ろう者たちがお互いに討論しながら自分の言語である手話を整理し、それを1つの本にまとめていく過程で、手話に対する自信に似たものをもつようになり、相手の意見を聞いて理解し、自分の意見をまとめて述べる力を身に付けていることが伺えた。

また、手話教授法を学習し、健聴者に手話を教えることによって、ろう者としての自分に自信をもつようになっていることも伺えた。

これはこのプロジェクトの最終的な目標である「ろう者の社会参加促進」にとって大きな成果であるといえる。

ただ、調査期間中に行われたワークショップの中での討議のときに、健聴者主導で討議が進められる場面が時折みられた。

これは、ワークショップのタスクフォースの一員が通訳を兼ねているため、通訳者の意見と通訳している内容とが混同されてろう者に受け止められやすいことと、教師が通訳を担っているため、無意識のうちに教師と生徒の関係が入り込んで、対等な立場での参加がなされにくいことが大きな原因であろう。

今後、全国での活動の展開により、ミャンマー国内の一般の人たちへの手話の普及が進むとともに、ろう者に対する理解が広まれば、状況が改善され、真に対等な立場でのろう者の社会参加が促進されることが期待される。

そのための条件として、ろう者組織の確立が必要であるが、その萌芽は今回のプロジェクトでタスクフォース内のろう者の仲間という形でできたのではないかと思われる。今後、これをどのようにして確固なものにし、ミャンマー当局にろう者の社会参加の促進に際してのろう者の組織の必要性を認識させていくかが大きな課題となっている。

全日本ろうあ連盟として、今後もこのプロジェクトに対して支援していく必要があり、そのためにもこのようなプロジェクトを担うことができるろう者の運動の専門家の育成が急務になっている。

（2）インクルーシブ教育実践校の状況について

ろう生徒は、支援担当が手話を覚えてサポートしてくれると言っていたが、実際に支援生徒が手話を使っている様子を見ることはできなかったし、こちらの質問に対してはろう生徒、健聴生徒ともに優等生的な答えが多く、実際の様子は伺うことはできなかったのは残念である。

ろう生徒に対する情報保障、学習の保障が行われないままにインクルーシブ教育が進められることはかなり危険なことであり、まずはろう学校での教育環境を充実させ、大学進学レベルまでの教育がしっかりできるようにすることが必要ではないかと感じた。

それでも、手話を使っていることと、同じ学校内に多数のろう生徒がいることもあり、口話だけだった私たちのころに比べると、生徒の表情は明るく、ろうであることを引け目に感じていないようだったのが救いだった。

ミャンマーのろう学校は2校しかなく、ミャンマーには義務教育制そのものがないため、地方では無就学のろう児が多くいることが予想される。開発途上国全体に共通していることであるが、このプロジェクトによる手話の普及、啓発と併せて、ろう児への教育をどのように浸透させていくかも考えていく必要がある。

たった10日間であったが、アジアの開発途上国の様子を実際に見ることができ、私にとって非常に貴重な体験となった。

付　属　資　料

１．評価グリッド

２．署名ミニッツ文書（Minutes of Meetings）

３．PDMの改訂検討（比較表）

１．評価グリッド

評価項目		評価設問 大項目	評価設問 小項目	判断基準・方法	必要なデータ	情報源	データ収集方法
実績の検証	上位目標の達成度（見込み）	ヤンゴンとマンダレーにおいてろう者の社会参加が促進される。 →ヤンゴンとマンダレーにおいてミャンマー手話が普及することで、ろう者の社会参加が促進される。	標準手話が普及する可能性は高いか。	標準手話を用いるろう者、その家族、手話通訳候補者、ろう学校教師の割合の増加	関係者の意見	プロジェクト報告書 関係者へのインタビュー結果	ドキュメントレビュー インタビュー
				研修受講者の標準手話を用いたコミュニケーション技術の向上			
			標準手話の普及により、ろう者の社会参加の促進に正のインパクトが発現する可能性が高いか。	インパクトの有無			
	プロジェクト目標達成度	社会福祉行政官とろう者コミュニティが共同で活動を計画・実施する協力関係が強化される。 →社会福祉行政官とろう者コミュニティが共同でミャンマー手話を普及する体制が構築される。	行政官とろう者コミュニティーの協力体制が構築されたか。	【PDM指標1】共同で実施した活動と内容の数		プロジェクト報告書 質問票の回答 関係者へのインタビュー結果	ドキュメントレビュー 質問票 インタビュー
				【PDM指標2】協力が促進された事例			
			標準手話を普及する体制が構築されたか。	タスクメンバーの標準手話教材の作成・評価・改定にかかわる知識、技術の向上	理解度、技術習得度の確認 関係者の意見		
				タスクメンバー、ファシリテーターの標準手話研修の実施・評価にかかわる知識、			
	成果の達成度	成果1：ろう者コミュニティが既存の標準手話教材語彙編を評価する能力を習得する。 →タスクフォースがミャンマー手話教材及び手話研修を評価する技術を習得する。	標準手話教材を評価する体制が構築されたか。	【PDM指標1】標準手話教材語彙編用の評価レポートが作成される。 標準手話教材の評価レポートが作成される。	標準手話教材評価レポートの有無 関係者の意見		ドキュメントレビュー インタビュー
			評価結果を受けて標準手話教材を改定する用意が行われているか。	【PDM指標2】標準手話教材語彙編用の改定計画が策定される。 標準手話教材の評価・改定計画が策定される。	評価・改定計画の有無 関係者の意見		
		成果2：標準手話教材文法編がろう者コミュニティの主導により作成される。	適切な標準手話教材文法編が作成されたか。	【PDM指標1】標準手話教材文法編が作成される。	関係者の意見		
				標準手話教材文法編が全国に配布される。	配布部数、配布エリア		
				ろう者の標準教材に対する満足度が5段階評価で3以上となる。	関係者の意見	プロジェクト報告書 質問票の回答 インタビュー結果	ドキュメントレビュー 質問票 インタビュー
			ろう者の参画により標準手話教材文法編が作成されたか。	【PDM指標2】ろう者が教材作成活動に参加した事例。	関係者の意見		
		成果3：ろう者とその家族、手話通訳候補者、ろう学校教師が標準手話を習得する。 →タスクフォース、ファシリテーターがミャンマー手話会話集に基づき、手話指導の技術を習得する。	質の高い標準手話研修が計画どおり実施されているか。	【PDM指標】標準手話（SSL）研修を受講したろう者とその家族、手話通訳候補者、ろう学校教師数	研修開催実績		
				標準手話（SSL）研修を受講したろう者とその家族、教員、政府関係者、政府関係者、社会福祉局職員数			
				標準手話（SSL）研修に対する満足度が5段階評価で3以上となる。	関係者の意見	プロジェクト報告書 質問票の回答 インタビュー結果	ドキュメントレビュー 質問票 インタビュー
			手話研修に関してモニタリング・評価が実施され、評価結果がフィードバックされているか。	モニタリング・評価実施件数及び評価結果の活用状況	関係者の意見	プロジェクト報告書 関係者へのインタビュー結果	ドキュメントレビュー インタビュー
		成果4：ろう者に関するコミュニティ（一般市民）の意識が向上する。	啓発ワークショップの計画が策定されているか。	参加者のろう者、手話に関わる意識が向上する。	計画の有無 関係者の意見		
			ろう者及び手話にかかわる意識向上のための活動が実施されているか。	意識向上にかかわるその他の活動の実施件数	メディアの活用状況 関係者の意見		
	投入の実績	日本側 長期専門家（業務調整・研修計画）1名 ・短期専門家 標準手話教材評価 標準手話教材開発 標準手話開発 標準手話教授法 手話通訳育成 啓発活動 ・在外事業強化費 ・機材	投入量、投入の質及び時期は計画どおりか。	計画と進捗の比較	時期、投入量、投入の質	報告書 関連文書 インタビュー結果	ドキュメントレビュー データ提出依頼 インタビュー
		ミャンマー側 ・カウンターパート配置 ・専門家執務スペース ・プロジェクト活動経費の一部負担（ワークショップ開催時の会場提供等）					
	外部条件	DSW、ろう者組織及びろう学校がプロジェクトに協力する。（前提条件）		協力、反対の有無	関係者の意見	報告書、関連文書、インタビュー結果	ドキュメントレビュー インタビュー
		タスクフォース・メンバー、ファシリテーター及びろう学校教員が業務を継続する。（成果への外部条件）		TF、ファシリテーター、教員の勤続状況			
		関係者（DSW、ろう者コミュニティ、ろう学校）のコミュニケーションが維持される。（プロジェクト目標への外部条件）		コミュニケーションの内容、頻度			
		ろう者の社会参加を促進するための政府政策が変わらない。（上位目標への外部条件）		政府政策の確認			

評価項目		評価設問		判断基準・方法	必要なデータ	情報源	データ収集方法
		大項目	小項目				
実施プロセスの検証	計画の進捗状況	成果1：ろう者コミュニティが既存の標準手話教材語彙編を評価する能力を習得する。 1.1社会福祉局、ろう者組織、ろう学校が標準手話教材語彙編を評価するタスクフォースを選出する。（ヤンゴン・マンダレーよりろう者各6名、ヤンゴン・マンダレーのろう学校より庁舎の教師各3名、社会福祉局2名）		達成度、達成時期などの確認及び計画との比較	達成度、達成時期	報告書 インタビュー結果	ドキュメントレビュー インタビュー
		1.2日本もしくは第三国からの専門家がタスクフォースに対し、標準手話教材語彙編評価に係るトレーニングを実施する。					
		1.3 タスクフォースが標準手話教材語彙編を評価する					
		1.4 タスクフォースが標準手話教材語彙編の将来的な改定に向けた計画を策定する。					
		成果2：標準手話教材文法編がろう者コミュニティの主導により作成される。 2.1タスクフォースが標準手話教材文法編作成の計画をつくる。					
		2.2 タスクフォースが標準手話教材文法編を作成する。					
		2.3 JCCが2－2の標準手話教材文法編を承認する。					
		2.4 標準手話教材文法編を作成・配布する。					
		成果3：ろう者とその家族、手話通訳候補者、ろう学校教師が標準手話を習得する。 3.1タスクフォースが標準手話教材語彙編・文法編を用いた標準手話研修の計画をつくる。					
		3.2 社会福祉局、ヤンゴン・マンダレーのろう者組織及びろう学校がファシリテーターを選出する。（タスクフォースのメンバー及びろう者数人を追加する。）					
		3.3 日本もしくは第三国からの専門家がファシリテーターに対し、手話教授法に関するトレーニングを実施する。（2～4週間）					
		3.4 ファシリテーターはろう者に対する標準手話トレーニングを実施する。（5時間×5日）					
		3.5 ファシリテーターはろう者の家族に対する標準手話トレーニングを実施する。（5時間×5日）					
		3.6 ファシリテーターはろう学校教師に対する標準手話トレーニングを実施する。（5時間×5日）					
		成果4. ろう者に関するコミュニティ（一般市民）の意識が向上する。 4.1 ファシリテーターが啓発活動の計画をつくる。					
		4.2 ファシリテーターが啓発活動に必要な資料を作成する。					
		4.3 ファシリテーターがソーシャルワーカーを対象にワークショップを実施する。（ヤンゴンとマンダレーで各1～2回）					
		4.4 ファシリテーターが一般校教師・生徒を対象にワークショップを実施する。（ヤンゴンとマンダレーで各1～2回）					
		4.5 ファシリテーターがローカル・国際NGOを対象にワークショップを実施する。（ヤンゴンとマンダレーで各1～2回）					
		4.6 ファシリテーターがろう者と上記ワークショップ参加者が交流するイベントを実施する。（ヤンゴンとマンダレーで各1回）					
		活動の阻害、貢献要因はあるか。		阻害、貢献要因の有無	活動実績 関係者の意見		
		追加・中止された活動はあるか。またその要因は何か。			活動計画、活動実績 関係者の意見		
	専門家とC/Pとの関係	専門家とC/Pの関係は良好か。	相互に信頼関係が醸成されているか。 相互の満足度は高いか。		関係者の意見	報告書 インタビュー結果	ドキュメントレビュー インタビュー
			相互コミュニケーションは十分に行われているか。				
	相手国実施機関のオーナーシップ	DSWのスタッフは主体的にプロジェクト活動に参加しているか。		プロジェクト業務への参加度	活動実績 関係者の意見		
		ミャンマー政府からのろう者支援に関する予算は計画どおり確保、支出されているか。		支出額、時期などの確認及び計画との比較	財務状況	報告書 関連文書 インタビュー結果	ドキュメントレビュー インタビュー
	モニタリング・評価のプロセス	プロジェクト活動のモニタリング・評価は効果的に実施されているか。	標準手話教材及び研修の質に関するモニタリング・評価体制は整備されているか。	モニタリング・評価実施件数及び評価結果の活用状況	モニタリング・評価の実施方法・実施体制・活動実績	報告書 インタビュー結果	ドキュメントレビュー インタビュー
			モニタリング・評価の結果は研修に適切にフィードバックされているか。				
	阻害要因及び貢献要因	活動進捗、成果達成、目標達成に阻害、貢献する要因はあるか。		阻害、貢献要因の有無	関係者の意見	報告書 インタビュー結果	ドキュメントレビュー インタビュー

評価項目		評価設問		判断基準・方法	必要なデータ	情報源	データ収集方法
		大項目	小項目				
妥当性	必要性	プロジェクト目標とミャンマー側（ターゲット・グループ）のニーズは一致しているか。	標準手話教材文法編はろう者、その家族、手話通訳候補者、ろう学校教師のニーズと合致しているか。	ニーズとの整合 満足度	研修受講者の満足度 関係者の意見	報告書 関連文書 質問票の回答 インタビュー結果	授業観察 ドキュメントレビュー 質問票 インタビュー
			標準手話研修はろう者、その家族、手話通訳候補者、ろう学校教師のニーズと合致しているか。				
	優先度	上位目標とミャンマー国家開発計画との整合性はあるか。	標準手話の普及は国家政策の優先事項に含まれているか。	国家社会福祉政策	社会福祉政策に係る文書 関係者の意見	関連文書 質問票の回答 インタビュー結果	ドキュメントレビュー 質問票 インタビュー
		プロジェクトと日本の援助政策、JICA国別事業実施計画との整合性はあるか。	日本の対ミャンマー援助重点課題、JICA国別事業実施計画に含まれているか。		日本の援助政策	国別援助計画 JICA国別事業実施計画	ドキュメントレビュー
	手段としての妥当性	プロジェクトのアプローチは適切だったか。	手話教材作成、研修の実施のためのタスクフォースメンバーの選定方法、人数は適切か。		プロジェクト活動実績 関係者の意見	報告書 インタビュー結果	ドキュメントレビュー インタビュー
			プロジェクト目標であるろう者間及びろう者と聴者間のコミュニケーションの促進の手段として追加すべき活動があるか。				
			プロジェクトのターゲットグループの選定は適切か。				
		日本の協力としての優位性はあるか。	プロジェクトには 日本の手話技術及び経験が生かされているか。	日本の経験の活用事例	関係者の意見	関係文書 インタビュー結果	ドキュメントレビュー インタビュー
			アジア太平洋障害者センター（APCD）の協力、経験が生かされているか。				
		他の機関等の協力関係はあるか。また協力内容の重複はないか。			他機関の協力内容	報告書 インタビュー結果	ドキュメントレビュー インタビュー
有効性	プロジェクト目標の達成予測	プロジェクト目標は適切か。	プロジェクト目標が達成される可能性は高いか。		投入・活動の実績 成果の達成度 関係者の意見	プロジェクト報告書 関連文書 インタビュー結果	ドキュメントレビュー インタビュー
			プロジェクト目標指標の設定レベルは適切か。		現時点での達成度 上位目標との因果関係		
	因果関係	プロジェクトのアウトプットはプロジェクト目標達成に貢献しているか。	作成された標準手話教材文法編は、ろう者間及びろう者と聴者間のコミュニケーションの促進に寄与しているか。	手話教材文法編の活用頻度	関係者の意見	プロジェクト報告書 関連文書 質問票の回答 インタビュー結果	ドキュメントレビュー 質問票 インタビュー
			標準手話の研修体制の構築は、ろう者間及びろう者と聴者間のコミュニケーションの促進に寄与しているか。	研修受講者の標準手話習得度			
		プロジェクト目標達成を阻害する要因はあるか。	タスクフォースのメンバーの交代及びそれによる影響はあるか。（外部条件）	TF、ファシリテーター、教員の勤続状況	プロジェクトの活動実績 関係者の意見	プロジェクト報告書 関連文章 インタビュー結果	ドキュメントレビュー インタビュー
			関係者（DSW、ろう者コミュニティ、ろう学校）のコミットメントと実施能力について、懸念すべきところがあるか。		関係者の意見		
			その他の阻害要因はあるか。	阻害要因の有無			
効率性	成果の達成度	成果は計画どおり達成しているか。阻害要因があるとすれば何か。		実績と計画（目標値）の比較 阻害要因の有無	計画の達成度、時期 関係者の意見	プロジェクト報告書 インタビュー結果	ドキュメントレビュー インタビュー
		各成果の指標の設定水準は適切か。			関係者の意見		
	因果関係	成果を産出するために十分な活動であったか。	短期専門家による研修及び本邦研修はタスクフォースの手話教材作成、研修実施能力の向上に寄与しているか。		関係者の意見	プロジェクト報告書 関連文書 質問票の回答 インタビュー結果	ドキュメントレビュー 質問票 インタビュー
			プロジェクトで作成された研修用教材は研修の質の向上に寄与しているか。				
			標準手話研修はろう者、その家族、手話通訳候補者、ろう学校教師の手話能力強化に寄与しているか。				
			ファシリテーターが啓発活動はろう者に関するコミュニティの意識が向上の寄与する可能性が高いか。				
		達成されたアウトプットからみて投入の質、量、タイミングは適切か。	専門家派遣人数、専門分野、派遣時期は適切か。		専門家派遣実績 関係者の意見	報告書 関連文書 インタビュー結果	ドキュメントレビュー インタビュー
			供与機材の種類、量、設置時期は適切か。		納入機材リスト 関係者の意見		
			本邦研修の分野、研修内容、研修時期、受入時期は適切か。		研修員受入実績 関係者の意見		
			日本側の現地活動費は適切か。		現地活動費実績 関係者意見		
			ミャンマー側のC/P配置、予算配分は適切か。		C/P在籍状況 プロジェクト経費 関係者の意見		
	プロジェクトの実施プロセスの効率性に影響を与えている要因	ローカル資源を有効に活用しているか。	ろう者組織等のプロジェクトへ巻き込みが効果的に行われているか、また組織の経験を有効に活用しているか。		関係者の意見	報告書 関連文書 インタビュー結果	ドキュメントレビュー インタビュー
			ろう学校等、既存施設などを有効に活用しているか。				
		その他効率性の貢献要因、阻害要因はあるか。		阻害、貢献要因の有無			

評価項目		評価設問		判断基準・方法	必要なデータ	情報源	データ収集方法
		大項目	小項目				
インパクト	上位目標の達成見込み	投入・成果の実績、活動の状況から、上位目標の達成の可能性は高いか。上位目標とプロジェクト目標は乖離していないか。			関連情報 関係者の意見	報告書 関連文書 インタビュー結果	ドキュメントレビュー インタビュー
		上位目標達成に必要なプロジェクト以外の要因が満たされる可能性は高いか。	ミャンマー政府が標準手話の普及に関して強いコミットメントを示しているか。		国家福祉政策における計画 関係者の意見	報告書 関連文書 質問票の回答 インタビュー結果	ドキュメントレビュー 質問票 インタビュー
			その他上位目標達成に必要な活動はあるか。		関係者の意見		
		上位目標の達成を阻害する要因はあるか。	ろう者間、ろう者と聴者間でのコミュニケーションの促進促進を阻害する要因はあるか。	阻害要因の有無			
	波及効果	標準手話研修受講生から未受講生への手話技術の共有はなされているか。		標準手話技術の共有の有無		報告書 インタビュー結果	ドキュメントレビュー インタビュー
		ろう学校教師は研修で習得した手話技術を学校において活用しているか。		ろう学校での活用実績			
		ヤンゴンとマンダレー以外の地域において、研修が実施される可能性は高いか。		他地域での研修実施計画の有無			
		上位目標以外の正負の効果・影響があるか。		正負の効果・影響の有無			
自立発展性	政策・制度面	ろう者の社会参加を促進するための政府政策が変わらない。（上位目標への外部条件）	標準手話の普及は福祉政策上の優先課題として位置づけられ続けるか。		標準手話に係る政策レベルの計画、戦略	報告書 関連文書 質問票の回答 インタビュー結果	ドキュメントレビュー 質問票 インタビュー
			DSWはプロジェクト終了後の研修の継続、他地域への研修の展開に係る戦略をもっているか。	戦略、計画の有無	標準手話研修に係る計画、戦略		
	組織・財政面	標準手話教材作成、研修の運営管理を担う組織は維持されるか。	教材作成及び研修運営管理がタスクフォース及びファシリテーターの主要な業務として定着しているか。		関係機関の組織体制	報告書 関連文書 インタビュー結果	ドキュメントレビュー インタビュー
			教材作成及び研修実施に関係するタスクフォース、ファシリテーターの役割分担は明確になっているか。		関係者の意見		
			教材作成及び研修実施に必要となる設備、機材は適切に維持管理されているか。		機材の維持管理状況		
		研修の継続に必要な財源は確保されているか。	DSWに研修を継続していくための財源は確保されているか。		財務状況		
	技術面	タスクフォース及びファシリテーターの能力開発は十分に行われているか。	タスクフォース及びファシリテーターに手話教材作成及び研修運営管理する能力が十分に備わっているか。		関係者の意見	報告書 関連文書 質問票の回答 インタビュー結果	ドキュメントレビュー 質問票 インタビュー
			タスクフォース及びファシリテーターが手話教材及び研修関連活動に関してオーナーシップをもっているか。				
		研修内容は参加者の技術レベル、ニーズにあっているか。	研修参加者の標準手話教材、研修内容に関する満足度が高いか。				
			研修参加者が目標としている標準手話に関わる知識、技能を修得したか。				
	社会・文化・環境面	持続的効果を阻害する要因はあるか		阻害要因の有無	関係者の意見	報告書 インタビュー結果	ドキュメントレビュー インタビュー
その他	軌道修正の必要性	投入・活動・アウトプットの内容を軌道修正する必要があるか。			関連情報	PDM 報告書 インタビュー結果	
		今後、留意していかなければならないことは何か。				報告書 関連文書 インタビュー結果	

MINUTES OF MEETING
BETWEEN
THE JAPANESE MID-TERM REVIEW TEAM
AND
THE DEPARTMENT OF SOCIAL WELFARE,
THE MINISTRY OF SOCIAL WELFARE, RELIEF AND RESETTLEMENT OF THE UNION OF MYANMAR
ON
JAPANESE TECHNICAL COOPERATION PROJECT
FOR
SUPPORTING SOCIAL WELFARE ADMINISTRATION
– PROMOTION OF SOCIAL PARTICIPATION OF THE DEAF COMMUNITY

The Japanese Mid-term Review Team (hereinafter referred to as "the Japanese Team") organized by the Japan International Cooperation Agency (hereinafter referred to as "JICA") and headed by Dr.Kenji Kuno, visited the Union of Myanmar from 26 November to 11 December, 2009.

During its stay in the Union of Myanmar, the Japanese Team had a series of discussions with Myanmar authorities concerned, jointly reviewed the achievement of the Project for Supporting Social Welfare Administration – Promotion of the Social Participation of the Deaf Community (hereinafter referred to as "the Project") and exchanged views on the project activities to fulfill the Record of Discussions (hereinafter referred to as "R/D") signed on July 18, 2007.

Both sides also discussed the detailed design of revised project design and tentative plan of activities. As a result of the discussions, the Japanese Team and the Myanmar authorities concerned agreed the matters referred in the document attached hereto.

Yangon, 10 December, 2009

Dr. Kenji Kuno
Leader of Mid-term Review Team
Japan International Cooperation Agency
Japan

U Soe Kyi
Director General
Department of Social Welfare
Ministry of Social Welfare, Relief and Resettlement
The Union of Myanmar

TABLES OF CONTENTS

1. Introduction **2**

1-1. Preface

1-2. Objectives of Review

1-3. Schedule of the Review Team

1-4. Members of the Review Team

1-5. Methodology of Review

2. Evaluation **6**

2-1. Achievement of the Project

2-2. Results of the Evaluation

3. Conclusion **9**

4. Recommendation **10**

5. Revision of Project Design Matrix **11**

ANNEXES

ANNEX 1. Evaluation Grid

1-1. Achievement of the Project and Implementation Process

1-2. Process of Project Implementation

1-3. Evaluation by Five Criteria

ANNEX 2. PDM (1) Draft

ANNEX 3. Revised Points of PDM

ANNEX 4 Revised Plan of Operation

ANNEX 5. Inputs to the Project

5-1. Placement Records of Japanese Experts

5-2. List of Participants of Counterpart Training in Japan

5-3. Counterparts List

1. Introduction

1-1. Preface

The Project was launched in Dismember 2007 and will be completed in December 2010. With the remaining period of the Project, approximately one year, JICA dispatched the Team to Myanmar from 26 November to 11 December, 2009 for the purpose of evaluating the achievement of the Project. The Mid-term Review has been undertaken jointly by the Review Team and Myanmar authorities concerned.

1-2. Objectives of Review

Objectives of the mid-term review are as follows:

(1) to review and evaluate the inputs, activities and achievements of the Project;

(2) to clarify the problems and issues to be addressed for the successful implementation of the Project for the remaining period;

(3) to assess the rationale for the continuation of the Project based on review and evaluation;

(4) to make recommendations for activities in the remaining period; and

(5) to review and revise the Project Design Matrix (PDM) if needed.

1-3. Schedule of the Review Team

1-3 Schedule of the Evaluation Team

Date		Mr.Ito	Kuno, Kawahara, Ogawa, Nakashima, Morimoto	Mori, Yamamoto
26-Nov	Thu	Narita → Yangon		
27-Nov	Fri	Meeting withJICA Myanmar Office Interview JICA Expert		
28-Nov	Sat	Interview (Yangon members+DSW)		
29-Nov	Sun	Interview (Yangon members+DSW)		
30-Nov	Mon	Interview (Mandalay members+DSW)		
1-Dec	Tue	Interview (Mandalay members+DSW)		
2-Dec	Wed	Preparation for Workshop Internal Meeting	Narita → Yangon	
3-Dec	Thu	Meeting with JICA Myanmar Office		
4-Dec	Fri	Preparation for Workshop		
5-Dec	Sat	Workshop at MiCasa		
6-Dec	Sun	Workshop at MiCasa M/M draft preparation		Yangon →
7-Dec	Mon	Yangon → Mandalay		→ Narita
8-Dec	Tue	Visiting Mandalay Deaf school Visiting Inclusive Education School in Mandalay (A la ka (5) middle School (No.5), High School No.7)		
9-Dec	Wed	Mandalay → Yangon Visiting Inclusive Education Schools in Yangon		
10-Dec	Thu	Reporting the result of Mid-term Review to DG of DSW (Sign the Minutes)		
11-Dec	Fri	Report to Japanese Embassy, JICA Myanmar Office Yangon → Bangkok →		
12-Dec	Sat	→ Narita		

1-4. Members of the Review Team

Dr. Kenji Kuno	Team Leader/Expert for PWDs Assistance, Senior Advisor for Social Welfare, JICA
Mr. Soya MORI	Standardized Sign Language Development, Deputy Director & Professor, Inter-disciplinary Studies Center, Institute of Developing Economies, JETRO
Mr. Masahiro Kawahara	Empowerment of the Deaf, Board Member, Japanese Federation of the Deaf
Mr. Keisuke Nakashima	Cooperation Planning, Social Security Division, Human Development Department, JICA
Mr. Haruo Ito	Evaluation and Analysis, Senior Consultant, Social System Dept., ICONS International Cooperation Inc.
Ms. Kayoko Ogawa	Sign Language Interpreter, Staff, Japanese Federation of the Deaf
Mr. Yukio Morimoto	Sign Language Interpreter, Manager of Regional Support section, Information and Culture Center for the Deaf, Inc.
Ms. Maiko Yamamoto	Sign Language Interpreter

1-5. Methodology of Review

Before starting the review, the Team had examined the PDM[1] agreed in the Record of discussion on July 18 of 2007 (hereinafter referred to as "PDM (0)"). The Team prepared the PDM to use for evaluation in Mid-term Review (hereinafter referred to as "PDM (e)") .

1-5-1. Evaluation Criteria

In accordance with the JICA Project Evaluation Guidelines of January 2004, the Mid-term Review of the Project was conducted in the following process:

Step1: PDM (e) was adopted as the framework of the Mid-term Review exercise, and the Project achievement was assessed vis-à-vis respective Objectively Verifiable Indicators. The level of inputs and activities were evaluated in comparison with the output levels.

Step2: Analysis was conducted on the factors that promoted or inhibited the achievement levels including matters relating to both the Project design and Project implementation process.

Step3: An assessment of the Project results was conducted based on the five evaluation criteria: "relevance", "effectiveness", "efficiency", "impact" and "sustainability".

[1] Within the latest JICA Evaluation Guidelines of 2004, the term "Logical Framework", or "Log Framework" has been introduced in place of Project Design Matrix (PDM). However since the Project continued referring to this tool as PDM throughout the Project Period, this Report will use the term PDM.

Step4: Recommendations for the Project stakeholders for the remaining implementation period and lessons learned formulated for future Project is to be implemented by both Myanmar and Japanese Governments.

Definition[2] of the five evaluation criteria that were applied in the analysis for the Mid-term Review is given in Table 1-1 below.

Table 1-1: Definition of the Five Evaluation Criteria for the Evaluation

Five Evaluation Criteria	Definition as per the JICA Evaluation Guidelines
1. Relevance	Relevance of the Project is reviewed by the validity of the Project Purpose and Overall Goal in connection with the Government development policy and the needs of the target group and/or ultimate beneficiaries in Myanmar.
2. Effectiveness	Effectiveness is assessed to what extent the Project has achieved its Project Purpose, clarifying the relationship between the Project Purpose and Outputs.
3. Efficiency	Efficiency of the Project implementation is analyzed with emphasis on the relationship between Outputs and Inputs in terms of timing, quality and quantity.
4. Impact	Impact of the Project is assessed in terms of positive/negative, and intended/unintended influence caused by the Project.
5. Sustainability	Sustainability of the Project is assessed in terms of institutional, financial and technical aspects by examining the extent to which the achievements of the Project will be sustained after the Project is completed.

1-5-2. Data Collection Method

Both quantitative and qualitative data were gathered and utilized for analysis. Data collection methods used by the Team were as follows:

- Literature/Documentation Review;
  - Report of the Consultative Mission
  - Meeting minutes of the Task Force (TF) meeting
  - Statistics for participants of Myanmar Sign Language demonstration
  - Progress Report

[2] "JICA Project Evaluation Guideline (revised: January 2004),"Office for Evaluation and Post Project Monitoring, JICA.

- Joint Coordination Committee Report
- Report of the short-term experts

➢ Interviews to key stakeholders;
- Japanese experts assigned to the Project
- Department of Social Welfare staff
- TF members
- Facilitators
- Participants of the Myanmar Sign Language workshop
- The Myanmar Sign Language conversation book recipients

➢ Questionnaire to key stakeholders;
- TF members
- Facilitators
- Participants of the Myanmar Sign Language workshop

2. Evaluation

2-1. Achievements of the Project

2-1-1 Outputs[3]

Output 1:	TF members acquire the skill to evaluate the Myanmar Sign Language teaching tools and workshop.
Output2:	The Myanmar Sign Language conversation book is developed with the Deaf community's own initiative.
Output3:	TF members and Facilitators acquire sign language teaching skills based on the Myanmar Sign Language teaching tools.
Output4:	The awareness among the community members (general public) on the Deaf is improved.

With the efforts of both Myanmar and Japanese sides, most of the planned activities have been implemented successfully, which will contribute to the attainment of the Project Purpose. The status of the attainment of each output is as follows:

Output1: Evaluation tools of Myanmar Sign Language workshop have been developed and utilized to feed back evaluation results. However, analysis and reporting of gathered evaluation data have been conducted by the Japanese expert. For a perspective of project sustainability, it is required that these tasks should be transferred to TF members remaining project period.

Output 2: The Myanmar Sign Language conversation book was developed through the cooperation between the DSW and the Deaf community. Most of the TF members expressed that they have gained basic knowledge and skill to develop a Sign Language conversation book. Moreover 10,000 books, 3,000 DVD and 2,000 VCDs were made by the Project and these teaching materials will be distributed within the Project period.

Output 3: Since March 2009, the TF members and Facilitators have been learning sign language teaching methods by conducting the Myanmar Sign Language workshop. The TF members have ability to develop teaching plans and teaching materials of the workshop. Most of the workshop participates are expressed that the TF members also have enough knowledge and skills as lecturers. By now, more than 830 participants attended this workshop.

Output 4: Activities to achieve Output 4 is in the planning stage. However, it is confirmed that the awareness of the Myanmar Sign Language workshop participants on the Deaf have been greatly improved at Yangon and Mandalay. Therefore awareness of the Deaf by general public is expected to be raised when the workshop is held in other provinces.

[3] Output 1 and 3 were specified from PDM (0) in order to evaluate project's outputs in detail. This revision was made based on project's documents review, e.g. Minutes of JCC meeting, project reports, and so on.

2-1-2. Project Purpose[4]

The structure and system of the promotion of Myanmar Sign Language with cooperation between the social welfare administrators, the Deaf community and other Project stakeholders is established.

All indexes of the Project Purpose have been achieved by the mid-period of the Project. If the capacity of the TF and facilitators is continually developed in remaining term, the Project Purpose will be attained successfully. The project propose achieved fully by implementing Myanmar Sign Language promotion program by using TF and Facilitators as teaching resources and the province DSW branch offices as coordinating structure.

2-1-3. Overall Goal[5]

In order to promote the social participation of the Deaf, Myanmar Sign Language is promoted nationally by the social welfare administrators, the Deaf community and other Project stakeholders.

Although the DSW has clear vision to promote Myanmar Sign Language to all provinces by own initiative, it is too early to conclude that the overall goal has been achieved. However positive outcomes have been revealed through the Project activities in Mandalay and Yangon. Thus, it seems possible to achieve the Overall Goal if the State/Division DSW Office is actively involved and enhance their capacity to manage Myanmar Sign Language workshops in their reasion.

2-2. Results of the Evaluation

2-2-1. Implementation Process

Most of the activities have been implemented as planned with the devoted efforts of the TF members and facilitators of the Project. Cooperation between the social welfare administrators and the Deaf community is strengthened through the implementation of the Project activities. Especially the promotion of better understanding of the Deaf by hearing TF members leads the Project to realize smooth implementation.

The capacity of TF members has been highly enhanced through the development of the first conversation book of Myanmar sign language under the guidance of the DSW and technical support of JICA experts. The conversation book of Myanmar sign language was approved by the Ministry of Social Welfare in September, 2009. After this success, the TF members have been

[4] Project Purpose was specified from PDM (0) in order to evaluate project's outputs in detail. This revision was made based on project's documents review, e.g. Minutes of JCC meeting, project reports, and so on.

[5] Overall Goal was specified from PDM (0) in order to evaluate project's outputs in detail. This revision was made based on project's documents review, e.g. Minutes of JCC meeting, project reports, and so on.

learning Sign Language Teaching Methods for the future implementation of the Myanmar Sign Language workshop to the general public.

The DSW and TF members have a clear vision for the promoting Myanmar Sign Language to the all provinces in Myanmar. The schedule of promotion activities has been developed.

2-2-2. Evaluation by Five Criteria

Results of the evaluation by five criteria are summarized in Table 2-1.

Table 2-1:Results of the Evaluation

Criteria	Evaluation Result	Description
Relevance	High	• The Project purpose is consistent with the priorities of the social welfare policy of Myanmar and the aid policy of the Japanese Government. • The needs of Myanmar Sign Language is high from the beneficially of the Project such as Deaf people and their families, prospective sign language interpreters and the Deaf school teachers. • The Japanese experience in the development of sign language has been applied to the Project activities by the Japanese experts.
Effectiveness	High	• Most of the planned activities have been implemented successfully, which will contribute to the attainment of the Project purpose. • The knowledge and skills of the TF members for developing Myanmar Sign Language teaching tools and conducting Myanmar Sign Language workshop have been enhanced through Project activities.
Efficiency	High	• The counterpart training in Japan and technical support of short-term experts are implemented at an appropriate timing. The contents of the technical support aligned with the needs of TF members. • The participants voluntarily attend to the Myanmar Sign Language workshop. This made the Project cost efficient. • Existing Deaf communities were effectively involved to the Project activities.
Impact	High	• The Project activities strengthen the ownership of Deaf community and build up their self-confidence in social participation. • The Myanmar Sign Language basic conversation book and The Myanmar Sign Language workshop promote communication between the Deaf and hearing people. • The Project activities enhance public awareness toward Deaf people. The project has been introduced several times by Myanmar media. • The dissemination of the project outcomes to the all provinces of Myanmar is planned by DSW and TF members' initiative.
Sustainability	Moderate	• DSW also strengthen their capacity to implement the Project activities. • The Project activates Deaf community associations and parent group of Deaf students. The sustainability of the Project will be secure by the participation of these stakeholders. • While Project activities depend on the voluntary participation of TF members, the appropriate incentive should be given to these members in order to secure the sustainability of the Project. • Monitoring and evaluation should be implemented by TF members for the effective feed back of the evaluation results to the future activities.

3. Conclusion

The project purpose is "the structure and system of the dissemination of Myanmar Sign Language with cooperation between the social welfare administrators and the Deaf community is established". The project aims at developing resource for teaching Myanmar Sign language and establishment the enabling structure and system that administration, Deaf and hearing community can active together.

With the devoted efforts of the TF members and facilitators, Project outputs to achieve the Project purpose have been produced as planned so far. The Project purpose is likely to be achieved if the TF members and facilitators continue to be actively involved in the Project activities.

By the efforts of TF members, Myanmar Sign Language conversation book was developed and launched in September 2009 with great success. Through this process, the capacity of the DSW and TF members was enhanced and this success leads to build self-confidence in social participation of the Deaf. Moreover, since March 2009, the TF members and Facilitators have been learning Sign language teaching methods through the Myanmar Sign Language workshops. By now, more than 830 participants attended this workshop.

However, there is still room for improvement in the Sign language teaching skills. The quality of the Myanmar Sign Language workshop also needs to be improved through conducting trial lessons. Moreover, in order to secure sustainability of the Project, TF members should play for active role in Monitoring and Evaluation of Sign Language workshop in which JICA expert that taking role at this moment. To promote such role of TF members, proper incentives and appropriate system should be developed.

4. Recommendations

Based on the results of the study, the following recommendations were made.

4-1.Developing a plan to promote Myanmar Sign Language nationally

This project is realizing expected outcomes in Yangon and Mandalay. These impacts would be extended to the other areas in Myanmar in the remaining period of this project. Feasible plan and target (areas, participants, approaches, and frequency) should be identified and developed in order to extend the impacts of this project nationally.

4-2. Promoting the role of facilitators by extending their roles and responsibilities

Facilitators are also gaining knowledge and skills along with TF members. They have potentials and responsibility to take more active roles as a facilitator to promote Myanmar Sign Language especially in the process of promotion of Myanmar Sign Language (Output 4) by having proper training and other inputs.

4-3. Extending the duration/term of activity of the JICA short term experts

Impacts of the training and other inputs by the JICA short term experts were significant and efficient to the development of Myanmar Sign Language. This impact would be enhanced more by extending the duration/term of activity of these short term experts or utilize other approaches, e.g. following up by other means.

4-4. Shifting the role of monitoring and evaluation of workshops and teaching tools of Myanmar Sign Language from Japanese expert to the TF members.

These evaluations have been conducted mainly by the Japanese expert and project staff of the Department of the Social Welfare (DSW). However, this role should be taken by the TF in order to make this process as sustainable development process of these workshops and tools beyond the project's period.

5. Revision of Project Design Matrix and Plan of Operation

As a result of the Mid-term Review, it was recommended that the PDM (0) and Plan of Operation (PO) should be revised for the better implementation of the Project. Based on this revision, PDM (1) Draft has been prepared. The PDM (1) Draft and revised points of PDM are shown in ANNEX 2 and 3. The revised PO is also shown in ANNEX 4. PDM (1) Draft will be authorized.

As for the information, Inputs to the Project are summarized in ANNEX 5.

ANNEXES

ANNEX 1. Evaluation Grid

1-1. Achievement of the Project and Implementation Process

1-2. Process of Project Implementation

1-3. Evaluation by Five Criteria

ANNEX 2. PDM (1) Draft

ANNEX 3. Revised Points of PDM

ANNEX 4. Revised Plan of Operation

ANNEX 5. Inputs to the Project

5-1. Placement Records of Japanese Experts

5-2. List of Participants of Counterpart Training in Japan

5-3. Counterparts List

ANNEX 1. Evaluation Grid

ANNEX 1-1: Achievements of the Project

Evaluation Items	Necessary Information and Data (Indicators)	Findings of Study
Achievement of Overall Goal		
In order to promote the social participation of the Deaf, Myanmar Sign Language is promoted nationally by the social welfare administrators, the Deaf community and other Project stakeholders.	The future possibility for promoting the Myanmar Sign Language at national level with the Deaf community's own initiative.	O The Myanmar Sign Language workshop has been implemented by the Deaf TF members. Considering that 835 participants have been attended to this workshop, the needs of Myanmar Sign Language from the general public is high. This indicates that there is possibility of promoting Myanmar Sign Language nationwide in the future. O Since the Myanmar Sign Language conversation book and workshop are highly appreciated by the participants, TF members have gained enough capacity to promote Myanmar Sign Language at the national level.
	The future possibility for the improvement of the awareness of the Deaf by general public.	O The awareness raising activities are still in the planning stage. However most of the participants of the Myanmar Sign Language workshop suggested that their awareness and attitude toward the Deaf people have been positively changed.
Achievement of Project Purpose		
The structure and system of the promotion of Myanmar Sign Language with cooperation between the social welfare administrators, the Deaf community and other Project stakeholders is established.	Case of the joint activities among social welfare administrators, the Deaf and other Project members.	O The TF includes the Deaf and the hearing people so that they worked together as well as the duties and responsibilities were shared in accordance with their respective skills in the process of developing the book. For example, the Deaf members did the tasks like taking pictures, tracing and drawing. And the duties like checking Myanmar language and putting supplements were performed by the hearing members. (Source: Project report) O TF was consisting of DSW staff, Deaf school teachers and the member of the Deaf associations. Moreover most of the TF members suggest that their awareness toward the Deaf and hearing people have been positively changed through the Project activities. *"Before this project started, I thought Deaf people are less in learning skill but after the training from Japanese Experts,' I can understand that they can catch up the Sign Language lessons more quickly. I think they are also eager to learn hard." (hearing TF member)* O Most of the Project activities are conducted by Deaf TF members with support of social welfare administrators. Therefore, the cooperative structure within the TF members has been established. *"DSW was very supportive for our activities. They introduced our activities to the other ministries and managed the Project." (Deaf TF member)*
	The degree of recipients' satisfaction to the Myanmar Sign Language conversation book	O All interviewees (parents of the Deaf students) who received the Myanmar Sign Language conversation book explained that the conversation book is useful and easy to understand. The conversation book also supports to break down communication barriers between Deaf students and their parents. *"The conversation book developed by the Project is easy to understand. Thanks for the book; I can communicate with my Deaf son much more than before". (Parent of the Deaf student)* *"The conversation book is great as a first Sign Language book in Myanmar. Please go through next editions in other topics." (Parent of the Deaf student)* O These high degrees of satisfaction on the Myanmar Sign Language conversation book show that TF members have already acquired the knowledge and skills to develop high quality Myanmar Sign Language teaching tools.
	The degree of participates' satisfaction to the Myanmar Sign Language workshop.	O According to the questionnaire to the participants of the Myanmar Sign Language workshop in the Project, the satisfaction rating of the workshop is 4.4 in five-level rating. This result also shows sufficient ability of TF members to conduct the Myanmar Sign Language workshop. O The participants also expressed positive comments as follows; *"The lecture of the Deaf was practical. I think the Deaf people have enough ability to teach their Sign Language."(hearing TF member)* *"Thanks for the Sign Language workshop. I can help Deaf students now." (high school teacher)*

	The degree of workshop participates' understanding on Myanmar Sign Language.	O According to the result of the questionnaire to TF members, all members have basic knowledge on the teaching methods and developing teaching material of the Sing Language workshop. O According to the result of the questionnaire, the rating of workshop participants' understanding on Myanmar Sign Language is 4.1 in five-level scale. This result also shows sufficient ability of TF members to conduct the workshop.
Achievement of Outputs		
Output 1: TF members acquire the skill to evaluate the Myanmar Sign Language teaching tools and workshops.	Monitoring and evaluation tools.	O The questionnaire to the participants of the Myanmar Sign Language workshop was developed by the Japanese expert. The results of the each workshop session has been fed back to the TF members and helped to improve the quality of the workshop. O Since the Myanmar Sign Language conversation books have not been distributed to the general public, the questionnaire to recipients of the conversation book to gather the comments from the recipients has not been prepared yet. Thus it is necessary that the Project will develop a short questionnaire on the conversation book for the future improvement of the activities.
	Evaluation report on the Myanmar Sign Language conversation book and workshop.	O For the Myanmar Sign Language workshop, Project has developed monitoring and evaluation tools and utilized them to feed back evaluation results. However, analysis and reporting of gathered evaluation data have been conducted by the Japanese expert. For a perspective of project sustainability, it is required that these tasks should be transferred to TF members remaining during the project period.
Output 2: The Myanmar Sign Language grammar conversation book is developed with the Deaf community's own initiative.	The Myanmar Signe Language conversation book is developed.	O In September 2009, the official ceremony to lunch distribution of Myanmar Sign Language conversation book was held by DSW. The process to develop the conversation book was follows; • Learning the grammar of Sign Language; • Decided 10 topics (e.g. greeting, family, education, and daily activities, etc.) and conversation sentences under those topics; • Taking the record of Sign Language for conversation sentences from 40 Deaf people; • Analyzed the record, and decided as Myanmar Sign Language; • Taking the pictures of Myanmar Sign Language; • Tracing the pictures by Deaf people; and • Editing of the tracing pictures in the computer. O Through the development of the Myanmar Sign Language conversation book, the TF members acquired following knowledge and skills. 1.Knowledge of Sign Language Grammar (Advance) - Comprehension and analysis 2. Development of the Myanmar Sign Language conversation book - Recording and analyzing Sign Language 3. Method of developing of Visual Materials for the Myanmar Sign Language conversation book - Making the guideline and plan 4. Understanding duties of hearing person and Deaf person in the Project activities. 5. Computer Skills (Word, Excel, Power Point)
	The degree of TF members' satisfaction to the Myanmar Sign Language conversation book.	O According to the result of the questionnaire, all TF members expressed satisfaction with participation in the process of developing the Myanmar Sign Language conversation book. The main reasons of the satisfaction are as follows; *"I could also get the basic knowledge about the Deaf and Sign Language through developing the Myanmar Sign Language conversation book."(Deaf TF members)* *"Communication of the TF members from Yangon and Mandalay was improved greatly by developing our Sign Language conversation book."(hearing TF members)*
	Distribution plan of the Myanmar Sign Language teaching tools	O 10,000 books, 3,000 DVD and 2,000 VCDs were made by the Project and these Sign Language teaching tools will be distributed within the Project period. These Myanmar Sign Language teaching tools will be handed over to the participants of the Myanmar Sign Language workshop.
	Capacity of TF members for developing the Myanmar Sign Language conversation book.	O According to the result of the questionnaire to the TF members, the rating of knowledge and skills to develop the Myanmar Sign Language conversation book was 4.7 in five-level scale. It is said that the TF member have enough capacity to develop the following editions of Myanmar Sign Language conversation books.

Output 3: TF members and Facilitators acquire Myanmar Sign Language teaching skills based on the Myanmar Sign Language teaching tools.	Number of the Deaf people, Deaf family members and Deaf school teachers who participated in the Myanmar Sign Language workshop.	O The Myanmar Sign Language workshop started on May 2009 in Mandalay, Yangon as a demonstration session. In total, 835 participants have already attended to the workshops as voluntary students. The number of the participant shows in the following table. Number of Participants in the Myanmar Sign Language workshop

Place	Parent of Deaf student	Teacher	Deaf school teacher	Government staff	DSW staff	NGO	Other	Total
Mandalay	15	11	2	69	20	49	43	209
Yangon	15	0	7	400	29	1	29	481
TF meeting	32	13	8		50	7	35	145
Total	62	24	17	469	99	57	107	835

Source: Project Report

	The degree of participates' satisfaction to teaching knowledge of the Sign Language lecturers.	O According to the result of the questionnaire to the Myanmar Sign Language workshop participants, the rating of lecturers' teaching skills is 4.7 in five-level scale. This result also shows sufficient ability of the TF members to conduct the Myanmar Sign Language workshop. O The major comments from the participant is positive, however following suggestions from the participant will help how to improve future workshop; *"The Myanmar Sign Language workshop should be held continuously without any gap."(parent of the Deaf student)* *"The Sign Language used by each lecturer should be unified, if not it is confusing." (workshop participant)*
	The degree of participates' satisfaction to The Myanmar Sign Language workshop	O According to the questionnaire to the participants of the Sign Language workshop, the rating of participants' satisfaction of the Sign Language workshop was 4.4 in five-level scale. This result also shows sufficient ability of the TF members to conduct the Myanmar Sign Language workshop.
Out Put 4: The awareness among the community members (general public) on the Deaf is improved.	The future possibility of the awareness rising among the general public on the Deaf	O While the activities for the Output 4 have not been implemented, however, according to the questionnaire to the participants of the Myanmar Sign Language workshop, the rating of the participants' awareness toward the Deaf was 4.5 in five-level rating. This result shows that most of the workshop participants have changed their awareness toward the Deaf people by attending this workshop.
Inputs Provided		
Inputs	Has the inputs of both Japanese and Myanmar side been provided as a plan?	O The following inputs were provided as planned (As of November 2009) Japanese Side: 1. Long-term expert : Project coordination/Training planning (1) 2. Short-term experts : - Myanmar Sign Language material evaluation (1) - Myanmar Sign Language teaching material development (1) - Myanmar Sign Language development (1) - Myanmar Sign Language teaching methods (1) -Sign Language interpreters development -Awareness raising activities 3. Training in Japan : Development of Myanmar Sign Language and text (10) Myanmar Sign Language teaching method (11) 4. Equipment : PC, copy machine, digital camera, video recorder, DVD player 5. Consultative mission : Mid-term review Myanmar side 1. Counterpart personnel : - Director, Rehabilitation Section, DSW - Deputy Director, Rehabilitation Section, DSW - Principal, Mandalay School for the Deaf, DSW - Deputy Director, Mandalay Division, DSW - Principal, Mary Chapman School for the Deaf 2. Office space for the experts :
Precondition		
DSW, the Deaf organizations and the Deaf schools are cooperative on this project.		O The TF members are composed by the staff from DSW, the Deaf organizations and the Deaf schools and the TF members facilitate interactions among these different organizations.

ANNEX 1-2: Process of the Project Implementation

<table>
<tr><th>Evaluation Items</th><th>Necessary Information and Data (Indicators)</th><th>Findings of Study</th></tr>
<tr><td>Implementation of planned activities</td><td>Record of implemented activities</td><td>○ Most of the activities have been implemented as planned with the devoted efforts of the TF members and facilitators of the Project.
○ Activities of Output 4 are in the planning stage. The promotion of the Myanmar Sign Language workshop to States/Division of Myanmar is planned by DSW and TF members' initiative.
○ The major inputs from Japanese side are as following table.
<table>
<tr><td>Short term experts from Japan</td><td>Mar.</td><td rowspan="3">2008</td></tr>
<tr><td>Training in Japan</td><td>June</td></tr>
<tr><td>Short term experts from Japan</td><td>Aug.</td></tr>
<tr><td>Training in Japan</td><td>Mar.</td><td rowspan="3">2009</td></tr>
<tr><td>Short term experts from Japan</td><td>Aug.</td></tr>
<tr><td>Short term expert from Japan</td><td>Sep.</td></tr>
</table>
Source: Project Record</td></tr>
<tr><td>Relation between stakeholders</td><td>Cooperative relationship between the Deaf and hearing people.</td><td>○ Cooperation between the social welfare administrators and the Deaf community has been strengthened through the implementation of the Project activities. Especially the promotion of better understanding of the Deaf by hearing TF members is leading the Project to realization of smooth implementation.
○ Japanese experts and the TF members frequently share information and exchange ideas. This timely and effective communication has facilitated the implementation process of the Project.
○ The results of interviews show that most of the TF members and Facilitators have good relationship with the Japanese experts.</td></tr>
<tr><td>Ownership of Stakeholders</td><td></td><td>○ Most of the TF members and Facilitators are highly motivated and committed to the Project.
○ Training by the short-term Experts, and training in Japan contributed to enhance the motivation and ownership of the TF members.</td></tr>
<tr><td rowspan="2">Monitoring and Evaluation (M&E) on the progress and achievement of the Project</td><td>M&E of the Myanmar Sign Language workshop</td><td>○ "Participant Questionnaire Myanmar Sign Language workshop", "Self Evaluation Sheet" and "Task Force Evaluation Sheet of Sign Language Teaching Method" have been developed as evaluation tools.
○ The results of M&E are shared with the stakeholders and fed back for the further improvement of the workshop. However, Evaluation Report was compiled by the Japanese expert.</td></tr>
<tr><td>M&E of the Myanmar Sign Language conversations books</td><td>○ Since the Myanmar Sign Language conversation books have not been distributed to the general public, the questionnaire to recipients of the conversation book to gather comments from the recipients has not been prepared yet. Thus it is necessary that the Project will develop a short questionnaire on the conversation book for the future improvement of the activities.</td></tr>
<tr><td>Prevention and Contribution Factor to Implementation Progress, Output and Project purpose achievement</td><td>Potential Challenges</td><td>○ In TF members, there are differences of capacity and motivation for Project Activities.
○ Facilitators are also gaining knowledge and skills along with TF members.
○ Their role and responsibility are not clearly identified. It causes major source of discontent of some of the Facilitators.</td></tr>
</table>

ANNEX 1-3. Evaluation by the Five Criteria

Relevance: High

Evaluation Items	Necessary Information and Data (Indicators)	Findings of Study
Necessity		
Consistency of Project Purpose and the needs of target group	Does the Project Purpose consist with the needs of TF members and Facilitators?	○ According to the result of questionnaire all TF members expressed their satisfaction in participating project activities. Moreover, all members also committed to the continuous participation to develop the Myanmar Sign Language teaching tools and implementing workshops. ○ Following statements show that Project Purpose has a consistency of the needs of TF members. *"I am always interested in the Sign Language. Through the Project activities, I can learn many things about Sing Language. It is a priceless experience for me."(hearing TF member)* *"I always wanted to support the Deaf people, so it is pleasure to join this Project. In addition, I am happy to be a part of society."(Deaf TF member)*
	Does the Project Purpose consist with the needs of the Deaf and their families, prospective sign language interpreters and the Deaf school teachers?	○ According to the questionnaire to the participants of the Myanmar Sign Language workshop, 89% of participates want to participate in the workshop again. ○ There is high demand of the Myanmar Sign Language conversation books and workshop from the Deaf, their families, the Deaf school teachers and so on.
Priority		
Consistency of Overall Goal and Project Purpose with the National Development Policy of Myanmar		○ In the national act in 2008, implementation of the support programs to disabled person by the government was declared. ○ The Social Welfare Program (2010-2012) in which includes the support to the Deaf has been implemented.
Consistency with the cooperation policy of Japan and the JICA country program		○ The Project aim is consistent with the cooperation policy of Japan and the JICA country program. ○ Supporting social welfare is one of the priority sectors of JICA Country Program on Myanmar.
Suitability as a Means		
Appropriateness of he approach	Are the selection and number of TF members and Facilitators are appropriate?	○ 20 TF members from DSW staff (2), Yangon (9) and Mandalay (9), and 12 Facilitators from Yangon (6) and Mandalay (6) were selected by DSW, the Deaf association and Deaf school. ○ Even though the selection of TF members and facilitators is appropriate, their capacity and motivation for Project vary among each individual.
	Is the Natural Approach appropriate as a teaching method?	○ Natural Approach is an effective approach to learn Sign Language practically. Most of the TF members expressed that the interaction between lecturers and participants was promoted by using the Natural Approach.
Japanese advantage in technical cooperation	Have the experience from similar projects been utilized in the Project?	○ Japanese experience in promoting Sign Language have been utilised in the project activities through the technical cooperation of the Japanese experts.
	Have the experience of APCD been utilized in the Project?	○ The third-country experts from APCD will be dispatched to make a plan for awareness raising seminar. The experiences which accumulated in the APCD Project have been utilised.

Effectiveness: High

Evaluation Items	Necessary Information and Data (Indicators)	Findings of Study
The Prospect of the Project Purpose Achievement		
The appropriateness of Project Purpose	Is the Project Purpose realistic?	○ DSW and the Deaf community have been jointly implementing the project activities. Most of the indices have already reached the target level of the Project Purpose. However, activities which focusing on the Myanmar Sign Language workshop at State/Division level through involving State/division DSW offices have not been conducted yet. It is needed to be addressed within the remaining Project period. ○ The human resource development of the TF members for developing the Myanmar Sign Language teaching tools and conducting the Myanmar Sign Language workshop have been enhanced through Project activities.
	Is the level of the Project Purpose appropriate?	○ Because the Project Purpose is aiming at establishing structure and system for promoting Myanmar Sing Language. Level of the Project Purpose is also appropriate to realise the Overall Goal. In addition, the indices of the Project Purpose were set based on the current progress of the Project.
Cause and Effect Relations		
Outputs contributing to the achievement of Project Purpose	Does development of the Myanmar Sign Language conversation book contribute to improve capacity of the TF members?	○ Through developing the Myanmar Sign Language conversation book, the capacity and self-reliance of the TF members and Facilitators have been improved. *"I could learn the Sign Language grammar deeply by developing the Myanmar Sign Language conversation book." (hearing TF member)* *"Through the training of short-term experts I could recognised the deference between the grammar of Sign language and spoken language." (hearing TF member)* ○ Some TF members also suggested that they need more expertise in analysing methods of sign language to develop future Sign Language teaching tools.
	Does the conducting the Myanmar Sign Language workshop contribute to improve capacity of the TF members and Facilitators?	○ According to the results of the questionnaire, all TF members expressed that they acquired knowledge and skills for conducting the Myanmar Sign Language workshop through the Project activities. ○ Even though most of the TF members expressed that they acquired enough knowledge and skills for conducting the Myanmar Sign Language workshop through the demonstration sessions, some of them felt that they need more practice and skills in teaching.
The factor to prevent the achievement of the Project Purpose	Is there any negative effect of the replacement of FT members on the achievement of the Project Purpose?	○ 3 TF members have been replaced during the project period due to their family issues. However the negative influence on the project activities was not identified. The new members were trained on the teaching methods of Myanmar Sign Language by other TF members. In addition, the Deaf people who left from the TF are still supporting the Project activities. ○ Around half of Deaf members participate TF as a volunteer. Some of them are facing difficulty to manage TF activities and their own work at the same time.

Efficiency: High

Evaluation Items	Necessary Information and Data (Indicators)	Findings of Study
Degree of Outputs Achievement		
Outputs achievement		○ Most of the activities have been implemented as planned with the devoted efforts of the TF members and facilitators of the Project.
Cause and Effect Relationship		
Activities for generating Outputs	Does Myanmar Sign Language conversation book contribute to improve sign language skills of the participants?	○ 91% of the participants of the Myanmar Sign Language workshop expressed that they acquired necessary knowledge and skills through the workshop. 90% of them suggested that the workshop was useful to promote their communication with the Deaf. ○ Some participants suggested that the communication with their Deaf children was improved through participation in the workshop. *"By joining the workshop, the communication with my son became easy. I feel that I could build on the better relationship with my son". (Parents of the Deaf student)*
	Does Myanmar Sign Language workshop contribute to improve sign language skills of the participants?	○ 91% of the participants of the Myanmar Sign Language workshop expressed that they acquired necessary knowledge and skills through the workshop and 90% of them suggest that the workshop was useful to promote their communication with the Deaf. ○ Some participants suggest that the communication with their Deaf children is promoted through participation in the workshop. *"By joining the workshop, the communication with my son becomes easy. I feel that I could build on the better relations with my son". (Parents of the Deaf student)*
	Does Myanmar Sign Language workshop at provincial level will contribute to improve the understanding of the Deaf by the general public?	○ State/Division level of the Myanmar Sign Language workshop is in the planning stage. However, it is confirmed that the awareness on the Deaf have been greatly improved at Yangon and Mandalay by the workshop. Therefore awareness of the Deaf by general public is expected to be raised, when the workshop is held in other States/Divisions.
Appropriateness of the imputes	Do training by the short-term experts and training in Japan contribute to improve the capacity of DSW staff and TF members?	○ The TF members learned teaching methods of sign language. According to the result of questionnaire, 92% of the TF members suggested that the training in Japan was satisfactory and all TF members expressed that the contents of the training were applicable to the Project activities. ○ The training by short-term experts corresponded to the needs of TF members and Facilitators to improve the knowledge of developing sign language conversation book and teaching skills. According to the result of questionnaire, all TF members were satisfied with the training by short-term experts.
Factors which have affected the efficiency of the implementation process of the Project		
Use of existing network	Does the Project utilize the technical support of APCD effectively?	○ The effective use of the Third-Country Experts from APCD is being planed to develop a strategy of the awareness raising activities.
Use of local resource	Does the Project utilize effectively the existing organization and facilities etc?	○ Existing Deaf community has been utilized for the Project activities, the TF members were selected from the Deaf schools and organizations in Yangon and Mandalay. ○ The Myanmar Sign Language workshops have been held in the Deaf schools in Yangon and Mandalay. Utilising these existing facilities is leading the Project more cost efficient.

Impact: High

Evaluation Items	Necessary Information and Data (Indicators)	Findings of Study
Achievement possibility of Overall Goal and Super Goal		
Expectation of Overall Goal achievement	Have the DSW and TF members acquired enough ability to achieve the Overall Goal.	O While the Myanmar Sign Language workshop was highly appreciated by the participants, the promotion of the Sign Language at national level will be realized after end of the Project period. O Most of the indices of the Project Purpose which show the capacity of DSW and TF members have been achieved. Therefore, when the Myanmar Sign Language workshop is held at the national level in the future, the indices of Overall Goal will also be achieved.
	Do DSW and TF members show strong commitment to promote Myanmar Sign Language?	O The DSW shows the commitment to promote Myanmar Sign Language at the Stage/Division level in near future. They have concrete strategy for its promotion. *"Awareness raising activities are very important to make a good understanding among general public that the Sign Language is one of the languages."(Deaf TF member)* O The involvement of the DSW staff from State/Division offices as the core member to manage the Myanmar Sign Language workshop at the State/Division level is concerned.
	Is the promotion of the social participation of the Deaf expected to be realised?	O As a result of the interview, most of the Deaf in the TF members expressed that they felt self-confident through teaching Sign Language. *"Teaching Sign Language to the hearing is a great experience and makes more self-confidence." (Deaf TF member)* *"The Deaf participated to the General Meeting of the Myanmar Disable People Organisation (MDPO) from this year. The Deaf people did not participate this meeting before. The Project obviously enhanced the self-confidence of the Deaf and supported their social participation."(DSW staff)* *"Many parents tends to keep Deaf children isolated in their homes, once parents understand about the Deaf and Sign Language, the social participation of the children will be greatly promoted." (Deaf Facilitator)*
Extended Effect		
Ripple effect	Is there any ripple effects?	O Some TF members expressed that they shared the knowledge and skills of Myanmar Sign Language to their co-workers and parents of the Deaf students. For example, the member of the Deaf associations shared Myanmar Sign Language to the other members and the Deaf school teachers also shared the knowledge to the new teachers. O The DSW also explained that the lessons and learned from this Project will be also applied to the project in other areas of social welfare.
	Is there any impact of the Myanmar Sign Language conversation book and workshop on the general public?	O The Myanmar Sign Language conversation book and The Myanmar Sign Language workshop promote communication between the Deaf and hearing people. O The Project activities have been introduced several times by Myanmar media. O 835 people have already attended to the Myanmar sign Language workshop and most of them realize that their attitude and awareness toward the Deaf have been changed positively. *"Through attending to the Sign Language workshop, I feel that participants can integrate into the Deaf community."(parent of the Deaf student)*
	Is there any strategy of the expansion of the Project?	O The promotion of Myanmar Sign Language at the State/Division level is being planned with DSW and TF members' initiative.

Sustainability: Moderate

Evaluation Items	Necessary Information and Data (Indicators)	Findings of Study
Policy Aspects		
Continuation of the policy support	Does DSW have future perspective to develop following Sign Language tools and continuation of the workshop?	O In the interviews, the importance of the support to the Deaf community has been declared by the Deputy Director of the DSW. O The DSW and TF members have strong aim to expand Myanmar Sign Language nationwide in the future.
Organization and Financial Aspects		
Management system	Is the role of the TF members and Facilitators clearly identified?	O The role of the Facilitators is to support TF members to develop the Myanmar Sign Language conversation book and implement the workshop. However the Facilitators are unsatisfied because of the restriction of the training and meeting opportunities. *"TF members should share the contents of the training to Facilitators. I would like to participate the training directly."(Deaf Facilitator)* O Some facilitators have been expecting to be TF members. *"I want to have same responsibly with the TF members in the Project." (Deaf Facilitator)*
	Is there any appropriate incentive for TF members and Facilitators to continue their activities?	O Some of the Deaf members suggest that they have difficulty to balance their work and the Project activities. However, all TF members expressed that they are eager to support the Deaf community and continue their activities. O In addition, the participation in the training in Japan and training of short-term experts are other major incentives to be a member.
	Does DSW have enough budget to continue the project activities after end of the Project.	O The running cost of the Project is covered by the Japanese side. However, this Project is implemented by the TF members and Facilitators who participate voluntary based. O The participants of the Myanmar Sign Language workshop participated in the workshop as volunteers. Without paying any allowance to the participants of the workshop promotes the financial sustainability of the Project.
Technical Aspects		
Capacity of TF members and Facilitators	Do the TF members and Facilitators acquire enough knowledge and skills to implement project activities?	O TF members have successfully managed the Myanmar Sign Language workshop. O According to the result of questionnaire, all TF members suggested that they have basic knowledge on Sing Language teaching methods and teaching tools. O According to the result of the questionnaire to the TF members, the rating of knowledge and skills to develop the Myanmar Sign Language conversation book is 4.7 in five-level scale. In addition, the rating of participants' satisfaction of the Sign Language workshop is 4.4 in five-level scale. These results show sufficient ability of the TF members to develop the following editions of the Myanmar Sign Language conversation books and conduct the Myanmar Sign Language workshops.
	Are the Project activities implemented on the initiative of TF members and Facilitators?	O Both TF members and Facilitators are highly motivated and committed to the Project. O Most of the Deaf members are motivated by communicating the Deaf short-term experts or visiting in Japan. One of the TF members recognized the potential of the Deaf in training in Japan. *"It was supplying that the Deaf taught the Sign Language in Japan. I understand that the Deaf people are able to provide for themselves, if there is the necessary environment for the Deaf."(Deaf TF members)*

ANNEX 2: PDM (1) Draft

Project Title : Project for Supporting Social Welfare Administration (Promotion of the Social Participation of the Deaf Community)
Project Period : December, 2007 – December, 2010 (three years)
Target Group : 【Direct beneficially】 DSW staff, Task Force members, Facilitators
【Final beneficially】 Deaf and their families, prospective sign language interpreters and the Deaf school teachers etc.

Narrative Summary	Objectively Verifiable Indicators	Means of Verification	Important Assumptions
Overall Goal In order to promote the social participation of the Deaf, Myanmar Sign Language (SL) is promoted nationally by the social welfare administrators, the Deaf community and other Project stakeholders.	1. The degree of participates' satisfaction to the Myanmar SL workshop nationwide achieves 4.0 in 5 rating scale 2. The degree of participates' understanding in the Myanmar SL workshop nationwide achieves 4.0 in 5 rating scale 3. The degree of participates' understanding of the Deaf in the Myanmar SL workshop nationwide achieves 4.0 in 5 rating scale	1. Questionnaires to nationwide workshop participant 2. Questionnaires to nationwide workshop participant 3. Questionnaires to nationwide workshop participant	
Project Purpose The structure and system of the promotion of Myanmar SL with cooperation between the social welfare administrators, the Deaf community and other Project stakeholders is established.	1. Case of the joint activities between social welfare administrators and stakeholders including the Deaf 2. The degree of recipients' satisfaction to Myanmar SL conversation book achieves 4.0 in 5 rating scale 3. The degree of participates' satisfaction to Myanmar SL workshop achieves 4.0 in 5 rating scale 4. The degree of participates' understanding in the Myanmar SL workshop achieves 4.0 in 5 rating scale	1. Project report, meeting record 2. Questionnaire to recipients 3. Questionnaires to workshop participant 4. Questionnaires to workshop participant	Government policy to promote social participation of the Deaf does not change.
Outputs 1. TF members acquire the skill to evaluate the Myanmar SL teaching tools and workshops.	1-1. Evaluation tools for Myanmar SL conversation book and workshop are developed 1-2. Number of evaluation reports issued by TF members 1-3. Improvemnet cases by the feedback from evaluation reports	1-1. Evaluation report 1-2. Evaluation report 1-3. Project report	Communication among the stakeholders (DSW, TF members, Facilitator) is maintained.
2. The Myanmar SL conversation book is developed with the Deaf community's own initiative.	2-1. Myanmar SL conversation book is developed 2-2. The degree of TF members' satisfaction to Myanmar SL conversation book achieves 4.0 in 5 rating scale 2-3. The number of distributed SL conversation books	2-1. Project report 2-2. Questionnaires to workshop participant 2-3. Questionnaire to TF members	
3. TF members and Facilitators acquire SL teaching skills based on the Myanmar SL teaching tools.	3-1. Teaching plan for the workshop is developed by the TF members 3-2. The degree of participates' satisfaction to teaching knowledge achieves 4.0 in 5 rating scale 3-3. The degree of participates' satisfaction to teaching material achieves 4.0 in 5 rating scale	3-1. Project report 3-2. Questionnaire to workshop participants 3-3. Questionnaire to workshop participants	
4. The awareness among the community members (general public) on the Deaf is improved.	4-1. Session and participant number of the Myanmar SL workshop at State/Division level. 4-2. The degree of participates' understanding of the Deaf in the Myanmar SL workshop at State/Division level achieves 4.0 in 5 rating scale	4-1. Project report 4-2. Questionnaire to State/Division workshop participants	
Activity 1-1 DSW, the Deaf organizations and the Deaf schools select TF members who assess Myanmar SL teaching tools and workshop. (6 Deaf people each from Yangon and Mandalay; 3 teachers with hearing from each of the Deaf schools in Yangon and Mandalay; 2 from DSW.) 1-2 Experts from Japan and/or other countries provide training on the assessment of Myanmar SL teaching tools and workshop to the TF members. 1-3 TF members evaluate the Myanmar SL teaching tools. 1-4 TF members issue evaluation report on Myanmar SL teaching tools and share. 1-5 TF members evaluate the Myanmar SL workshop. 1-6 TF members issue evaluation report on Myanmar SL workshop and share. 2-1. Task Force develops the guidelines for Myanmar SL conversation book development. 2-2. Task Force develops Myanmar SL conversation book. 2-3. Joint Coordinating Committee (JCC) approves the Myanmar SL conversation book developed in 2-2. 2-4. SL conversation book is produced and distributed. 3-1. TF develops the plan for Myanmar SL workshop. 3-2. DSW, the Deaf organizations and the Deaf schools in Yangon and Mandalay select the Facilitators. 3-3. Experts from Japan and/or other countries provide training on SL teaching methods to the TF members and Facilitators. 3-4. TF members and Facilitators develop teaching plan and materials for Myanmar SL workshop 3-5. TF members and Facilitators provide Myanmar SL workshop. 4-1. TF develops the contents of Myanmar SL workshop (State/Division level). 4-2. DSW establishes the implementation unit of Myanmar SL workshop (State/Division level). 4-3. DSW and TF members develop the implementation plan for Myanmar SL workshop (State/Division level). 4-4. DSW selects person in charge of Myanmar SL workshop from State/Division DSW offices. 4-5. DSW, TF members and Facilitators conduct the seminar to State/Division responsible persons on Myanmar SL workshop (State/Division level). 4-6. DSW, TF members and Facilitators conduct Myanmar SL workshop (State/Division level).	**Input** Japanese side 1. Long-term expert : Project coordinator/Training planning 2. Short-term experts (including experts from other countries) : -SSL teaching material evaluation -SSL teaching material development -SSL development -SSL teaching methods -SL interpreters development -Awareness raising activities -Other areas deemed necessary (*The number and the areas of expertise of the experts are to be confirmed each year.) 3. Training in Japan : 8 -10 persons×2 -3 weeks×once a year ×2 years (total 2 times) (*The number and the contents of the training are to be confirmed each year.) 4. Equipment : PC, copy machine, digital camera, video recorder, DVD player 5. Consultative mission Myanmar side 1. Counterpart personnel : - Director, Rehabilitation Section, DSW - Deputy Director, Rehabilitation Section, DSW - Principal, Mandalay School for the Deaf, DSW - Deputy Director, Mandalay Division, DSW - Principal, Mary Chapman School for the Deaf 2. Office space for the experts : 3. Part of the project cost : training/workshop venues, etc.	TF members, Facilitators continue their work. **Pre-conditions** DSW, the Deaf organizations and the Deaf schools are cooperative on this project.

ANNEX 3 Revised Points of PDM

PDM (0) was revised by elaborating indicators to evaluate its progress and achievement in details. Several expressions of purposes, outputs and activities were also adjusted according to the results of interviews to Taskforce members as below, PDM 1 (draft).

		PDM (0)	PDM (1)
Overall Goal		Participation of the deaf in the society is promoted in Yangon and Mandalay	In order to promote the social participation of the Deaf, Myanmar Sign Language (SL) is promoted nationally by the social welfare administrators, the Deaf community and other Project stakeholders.
	Indicators		1. The degree of participates' satisfaction to the Myanmar SL workshop nationwide achieves 4.0 in 5 rating scale 2.The degree of participates' understanding in the Myanmar SL workshop nationwide achieves 4.0 in 5 rating scale 3.The degree of participates' understanding of the Deaf in the Myanmar SL workshop nationwide achieves 4.0 in 5 rating scale
Project Purpose		Cooperation between the social welfare administrators and the deaf community to jointly plan and implement activities is strengthened.	The structure and system of the promotion of Myanmar SL with cooperation between the social welfare administrators, the Deaf community and other Project stakeholders is established.
	Indicators	1.The number and the contents of the joint activities are recorded. 2.Examples of the improvement of cooperation are recorded.	1. Case of the joint activities between social welfare administrators and stakeholders including the Deaf 2. The degree of recipients' satisfaction to Myanmar SL conversation book achieves 4.0 in 5 rating scale 3. The degree of participates' satisfaction to Myanmar SL workshop achieves 4.0 in 5 rating scale 4. The degree of participates' understanding in the Myanmar SL workshop achieves 4.0 in 5 rating scale
Output 1		The deaf community acquires the capacity to assess the existing standardized sign language (SSL) vocabulary part.	TF members acquire the skill to evaluate the Myanmar SL teaching tools and workshops.
	1-1	DSW, the deaf organizations and the deaf schools select Task Force members who assess SSL vocabulary part. (6 deaf people each from Yangon and Mandalay; 3 teachers with hearing from each of the deaf schools in Yangon and Mandalay; 2 from DSW.)	DSW, the Deaf organizations and the Deaf schools select TF members who assess Myanmar SL teaching tools and workshop. (6 Deaf people each from Yangon and Mandalay; 3 teachers with hearing from each of the Deaf schools in Yangon and Mandalay; 2 from DSW.)
	1-2	Experts from Japan and/or other countries provide training on the assessment of SSL vocabulary part to the Task Force.	Experts from Japan and/or other countries provide training on the assessment of Myanmar SL teaching tools and workshop to the TF members.
	1-3	Task Force assesses the current SSL vocabulary part.	TF members evaluate the Myanmar SL teaching tools.
	1-4	Task Force develops a plan for the revision of SSL vocabulary part in the future.	TF members issue evaluation report on Myanmar SL teaching tools and share.
	1-5		TF members evaluate the Myanmar SL workshop.
	1-6		TF members issue evaluation report on Myanmar SL workshop and share.
	Indicators	1-1. Evaluation report on the vocabulary part is developed. 1-2. Plan for revising the vocabulary part is developed.	1-1. Evaluation tools for Myanmar SL conversation book and workshop are developed 1-2. Number of evaluation reports issued by TF members 1-3.Improvemnet cases by the feedback from evaluation reports
Output 2		The SSL grammar part is developed with the deaf community's own initiative.	The Myanmar SL conversation book is developed with the Deaf community's own initiative.
	2-1	Task Force develops the guidelines for SSL grammar part development.	Task Force develops the guidelines for Myanmar SL conversation book development.
	2-2	Task Force develops SSL grammar part.	Task Force develops Myanmar SL conversation book.
	2-3	Joint Coordinating Committee (JCC) approves the SSL grammar part developed in 2-2.	Joint Coordinating Committee (JCC) approves the Myanmar SL conversation book developed in 2-2.
	2-4	SSL grammar part is produced and distributed.	SL conversation book is produced and distributed.
	Indicators	2-1. Grammar part is developed. 2-2. Examples of active participation of the deaf are recorded.	2-1. Myanmar SL conversation book is developed 2-2. The degree of TF members' satisfaction to Myanmar SL conversation book achieves 4.0 in 5 rating scale 2-3. The number of distributed SL conversation books

Output 3		The deaf and their families, prospective sign language interpreters and the deaf school teachers acquire SSL	TF members and Facilitators acquire SL teaching skills based on the Myanmar SL teaching tools.
	3-1	Task Force develops the plan for SSL training by utilizing the SSL textbooks (vocabulary part and grammar part).	TF develops the plan for Myanmar SL workshop.
	3-2	DSW, the deaf organizations and the deaf schools in Yangon and Mandalay select the Facilitators (Task Force members and additional members - both deaf and hearing)	DSW, the Deaf organizations and the Deaf schools in Yangon and Mandalay select the Facilitators.
	3-3	Experts from Japan and/or other countries provide training on sign language teaching methods to the Facilitators. (2-4 weeks)	Experts from Japan and/or other countries provide training on SL teaching methods to the TF members and Facilitators.
	3-4	Facilitators provide SSL training to the deaf people. (5 hours x 5 days)	TF members and Facilitators develop teaching plan and materials for Myanmar SL workshop
	3-5	Facilitators provide SSL training to the deaf families. (5 hours x 5 days)	TF members and Facilitators provide Myanmar SL workshop.
	3-6	Facilitators provide SSL training to the deaf school teachers. (5 hours x 5 days)	
	Indicators	3-1. Number of the deaf people, deaf family members and deaf school teachers who received SSL training.	3-1. Teaching plan for the workshop is developed by the TF members 3-2. The degree of participates' satisfaction to teaching knowledge achieves 4.0 in 5 rating scale 3-3. The degree of participates' satisfaction to teaching material achieves 4.0 in 5 rating scale
Output 4		The awareness among the community members (general public) on the deaf is improved	The awareness among the community members (general public) on the Deaf is improved.
	4-1	Facilitators develop the plan for awareness raising activities.	TF develops the contents of Myanmar SL workshop (State/Division level).
	4-2	Facilitators develop the materials for awareness raising activities.	DSW establishes the implementation unit of Myanmar SL workshop (State/Division level)
	4-3	Facilitators conduct workshops for social workers. (1-2 times each in Yangon and Mandalay.)	DSW and TF members develop the implementation plan for Myanmar SL workshop (State/Division level).
	4-4	Facilitators conduct workshops for teachers and students in general schools. (1-2 times each in Yangon and Mandalay.)	DSW selects person in charge of Myanmar SL workshop from State/Division DSW offices.
	4-5	Facilitators conduct workshops for local and international NGOs. (1-2 times each in Yangon and Mandalay.)	DSW, TF members and Facilitators conduct the seminar to State/Division responsible persons on Myanmar SL workshop (State/Division level).
	4-6	Facilitators organize an event for the deaf and the workshop participants to socialize. (1 time each in Yangon and Mandalay.)	DSW, TF members and Facilitators conduct Myanmar SL workshop (State/Division level).
	Indicators	Number of the workshops and participants	4-1. Session and participant number of the Myanmar SL workshop at State/Division level. 4-2.The degree of participates' understanding of the Deaf in the Myanmar SL workshop at State/Division level achieves 4.0 in 5 rating scale

ANNEX 4. Plan of Operation: Project for Supporting Social Welfare Administration (Promotion of Social Participation of the Deaf Community)

	Activities in Project Narrative Summary	2008	2009	2010
		11 12 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
	OUTPUT 1: TF members acquire the skill to evaluate the Myanmar SL teaching tools and workshops.			
1-1	DSW, the Deaf organizations and the Deaf schools select TF members who assess Myanmar SL teaching tools and workshop. (6 Deaf people each from Yangon and Mandalay; 3 teachers with hearing from each of the Deaf schools in Yangon and Mandalay; 2 from DSW.)			
1-2	Experts from Japan and/or other countries provide training on the assessment of Myanmar SL teaching tools and workshop to the TF members.			
1-3	TF members evaluate the Myanmar SL teaching tools.			
1-4	TF members issue evaluation report on Myanmar SL teaching tools and share.			
1-5	TF members evaluate the Myanmar SL workshop.			
1-6	TF members issue evaluation report on Myanmar SL workshop and share.			
	OUTPUT 2: The Myanmar SL conversation book is developed with the Deaf community's own initiative.			
2-1	Task Force develops the guidelines for Myanmar SL conversation book development.			
2-2	Task Force develops the guidelines for Myanmar SL conversation book development.			
2-3	Joint Coordinating Committee (JCC) approves the Myanmar SL conversation book developed in 2-2.			
2-4	SL conversation book is produced and distributed.			
	OUTPUT 3: TF members and Facilitators acquire SL teaching skills based on the Myanmar SL teaching tools.			
3-1	TF develops the plan for Myanmar SL workshop.			
3-2	DSW, the Deaf organizations and the Deaf schools in Yangon and Mandalay select the Facilitators.			
3-3	Experts from Japan and/or other countries provide training on SL teaching methods to the TF members and Facilitators.			
3-4	TF members and Facilitators develop teaching plan and materials for Myanmar SL workshop			
3-5	TF members and Facilitators provide Myanmar SL workshop.			
	OUTPUT4: The awareness among the community members (general public) on the Deaf is improved.			
4-1	TF develops the contents of Myanmar SL workshop (State/Division level).			
4-2	DSW establishes the implementation unit of Myanmar SL workshop (State/Division level)			
4-3	DSW and TF members develop the implementation plan for Myanmar SL workshop (State/Division level).			
4-4	DSW selects person in charge of Myanmar SL workshop from State/Division DSW offices.			
4-5	DSW, TF members and Facilitators conduct the seminar to State/Division responsible persons on Myanmar SL workshop (State/Division level).			
4-6	DSW, TF members and Facilitators conduct Myanmar SL workshop (State/Division level).			

ANNEX 5. Inputs to the Project

5-1. Placement Records of Japanese Experts

•Long Term Expert

Name	Title	Duration
Ms.Mitsuko OGAWA	Project Coordinator/Training Planning	11 December 2007 ~

•Short Term Expert

Name	Title	Duration
Mr. Soya MORI	Sign language teaching material evaluation	17 March 2008 ~29 March 2008
Mr. Hidetada TASHIRO	Standardized sign language (SSL) teaching material development (planning)	
Ms. Kayoko OGAWA	*Sign Language Interpreter*	
Ms. Kagari MISAWA	*Sign Language Interpreter*	
Mr. Shinichiro NAKAYAMA	SSL Teaching Material Development (Text)	24 August 2008 ~4 September 2008
Ms. Hitomi AKAHORI	SSL Teaching Material Development (Visual Material)	
Ms. Tomomi KANNO	*Sign Language Interpreter*	
Ms. Mika ARAI	*Sign Language Interpreter*	
Mr. Shinichiro NAKAYAMA	Sign Language Teaching Method (Theory)	24 August 2009 ~2 September 2009
Ms. Hitomi AKAHORI	Sign Language Teaching Method (Making Materials)	
Ms. Maiko YAMAMOTO	*Sign Language Interpreter*	
Ms. Mika ARAI	*Sign Language Interpreter*	
Mr. Satoshi OSONOE	Sign Language Teaching Method (Demonstration)	21 September 2009 ~4 October 2009

5-2. List of Participants of Counterpart Training in Japan

- 4 June 2008 ~25 June 2008

1	Mr. Aung Kyaw Moe	Ministry of Social Welfare, Relief and Resettlement, Department of Social Welfare(Mandalay Division) Deputy Director
2	Ms. Sarah Win	Ministry of Social Welfare, Relief and Resettlement, Department of Social Welfare Assistant Director
3	Ms. Khin San Yee	Mandalay School for the Deaf Principal
4	Ms. Bway Say Wah	Mary Chapman School for the Deaf Vice Principal
5	Mr. Kyaw Zin Win	Mandalay Deaf Youth Development Centre Chairperson
6	Mr. Tun Min Aung	Mandalay Deaf Youth Development Centre Executive
7	Ms. Yadanar Aung	Mandalay Deaf Youth Development Centre Secretary
8	Mr. Kyaw Yu	Yangon Deaf Association President
9	Mr. S'don Mwight	Mary Chapman School for the Deaf Teacher
10	Mr. Bo Bo Kyaing	Yangon Deaf Association Adviser

- 1 March 2009 ~7 March 2009

1	Mr. Aung Tun Khine	Ministry of Social Welfare, Relief and Resettlement, Department of Social Welfare Deputy Director General

- 1 March 2009 ~ 20 March 2009

1	Mr. Aung Kyaw Moe	Ministry of Social Welfare, Relief and Resettlement, Department of Social Welfare(Mandalay Division) Deputy Director
2	Ms. Yu Yu Swe	Ministry of Social Welfare, Relief and Resettlement, Department of Social Welfare Assistant Director
3	Ms. Khin San Yee	Mandalay School for the Deaf Principal
4	Ms. Mai New Ni	Mary Chapman School for the Deaf Teacher
5	Mr. Kyaw Zin Win	Mandalay Deaf Youth Development Centre Chairperson
6	Mr. Myat Aung Naing Thant	Mandalay Deaf Youth Development Centre Vice Chairperson
7	Ms. Yadana Aung	Mandalay Deaf Youth Development Centre Secretary
8	Mr. Tin Aye Ko	Yangon Deaf Association Secretary
9	Mr. Win Naing	Yangon Deaf Association Public Relation
10	Mr. Bo Bo Kyaing	Yangon Deaf Association Adviser

5-3. Counterparts List

- Counterpart personnel

Department of Social Welfare

(1) Director, Rehabilitation Section,

(2) Deputy Director, Rehabilitation Section

(3) Principal, Mandalay School for the Deaf

(4) Deputy Director, Mandalay Division

(5) Principal, Mary Chapman School for the Deaf

- List of the Task Force Members

	Name	Institution	Position
1	Mr. Aung Kyaw Moe	Ministry of Social Welfare, Relief and Resettlement, Department of Social Welfare	Deputy Director, Mandalay Division
2	Ms. Yu Yu Swe	Ministry of Social Welfare, Relief and Resettlement, Department of Social Welfare	Assistant Director
3	Ms. Khin San Yee	Mandalay School for the Deaf	Principal
4	Ms. Thida Swe	Mandalay School for the Deaf	Teacher
5	Ms. Myat Myat Soe	Mandalay School for the Deaf	Teacher
6	Ms. Bway Say Wah	Mary Chapman School for the Deaf	Vice Principal
7	Ms. Myitzu Thein	Mary Chapman School for the Deaf	Teacher
8	Ms. Mai Nwe Ni	Mary Chapman School for the Deaf	Teacher
9	Mr. Kyaw Yu	Yangon Deaf Association	President
10	Mr. Tin Aye Ko	Yangon Deaf Association	Secretary
11	Mr. Bo Bo Kyaing	Yangon Deaf Association	Adviser
12	Mr. Win Naing	Yangon Deaf Association	Public Relations
13	Ms. Naw Hsar Paw	Mary Chapman School for the Deaf	Vocational Teacher
14	Ms. Naw Shee Myar	Mary Chapman School for the Deaf	Volunteer
15	Mr. Kyaw Zin Win	Mandalay Deaf Youth Development Centre	Chairman
16	Mr. Myat Aung Naing Thant	Mandalay Deaf Youth Development Centre	Vice Chairman
17	Mr. Aung Aye Soe	Mandalay Deaf Youth Development Centre	Fund Raising
18	Mr. Tun Min Aung	Mandalay Deaf Youth Development Centre	Working Committee
19	Ms. Yadana Aung	Mandalay Deaf Youth Development Centre	Secretary
20	Ms. Maw Maw Soe	Mandalay Deaf Youth Development Centre	Member Affairs

•List of the Facilitators

	Name	Institution	Position
1	Mr. Maung Maung	Mandalay School for the Deaf	Vice Principal
2	Mr. Thein Than Win	Mandalay School for the Deaf	Teacher
3	Ms. Lily Htoo	Mary Chapman School for the Deaf	Teacher
4	Ms. Mary Myint Myint Thu	Mary Chapman School for the Deaf	Teacher
5	Mr. Myint Thet Naing Htun	Mandalay Deaf Youth Development Centre	Executive Member
6	Mr. Saw Lwin Htun	Mandalay Deaf Youth Development Centre	Executive Member
7	Mr. Aung Bo Bo	Mandalay Deaf Youth Development Centre	Executive Member
8	Mr. Khin Aung Lwin	Mandalay Deaf Youth Development Centre	Executive Member
9	Mr. Kyaw Min	Yangon Deaf Association	Vice President
10	Ms. Ohmar Khin	Yangon Deaf Association	Treasure
11	Ms. Phyu Phyu Zin	Yangon Deaf Association	Member
12	Ms. Su Su Aye	Yangon Deaf Association	Member

３．PDMの改訂検討（比較表）

ミャンマー「社会福祉行政官育成（ろう者の社会参加促進）プロジェクト」中間レビュー調査
PDMの改訂検討（比較表）

2009.12.6版

【用語の変更】
標準手話（SSL)⇒ミャンマー手話：　各国の手話の呼称としては、より一般的である分かりやすい表記に変更した。
標準手話教材文法編⇒ミャンマー手話会話集

【新出用語】
ミャンマー手話教材：プロジェクトで作成したミャンマー手話会話集とDVD＆VCD
ミャンマー手話研修：成果3の指導者育成の一環（実習目的）としての手話研修と、成果4のろう者理解と手話認知の促進のための啓発目的の研修の両者を含む研修
州研修実施のための運営委員会：州レベルで行う研修に関して計画・運営管理を行う組織として本局に設置する委員会

現行PDM			改定案	理由
上位目標	ヤンゴンとマンダレーにおいてろう者の社会参加が促進される。		ろう者の社会参加促進のため、社会福祉行政官とろう者コミュニティ及びその他プロジェクト関係者により、全国にミャンマー手話が普及する。	プロジェクトではミャンマー手話の普及をめざしており、その結果としてプロジェクト終了後にミャンマー手話を身に付けたろう者の社会参加が促進されるという記述。
	指標	なし	1.全国のミャンマー手話研修の参加者の満足度が５段階の４以上と評価される 2.全国のミャンマー手話研修の参加者の理解度が５段階の４以上と評価される 3.全国のミャンマー手話研修の参加者のろう者に関する理解度が５段階の４以上と評価される	ミャンマー手話が普及した状況を測定する指標を設定。
プロジェクト目標	社会福祉行政官とろう者コミュニティが共同で活動を計画・実施する協力関係が強化される。		社会福祉行政官とろう者コミュニティ及びその他プロジェクト関係者が共同でミャンマー手話を普及する体制が強化される。	行政官とろう者の共同活動の強化はプロジェクト実施上の手段であり、プロジェクトの活動を考えると、ミャンマー手話の普及体制の構築が目的となる。
	指標	1.共同で実施した活動と内容の数 2.協力が促進された事例	1.共同で実施した活動と内容の数 2.協力が促進された事例 3.タスクメンバーの標準手話教材の作成・評価・改定にかかわる知識、技術の向上 4.タスクメンバー、ファシリテーターの標準手話研修の実施・評価にかかわる知識、技術の向上	ミャンマー手話普及体制の構築を測定する指標として3、4を追加する。
成果1	ろう者コミュニティが既存の標準手話教材語彙編を評価する能力を習得する		タスクフォースがミャンマー手話教材及び手話研修を評価する技術を習得する。	語彙編の評価能力向上にかかわる活動に限定するのではなく、プロジェクトで作成する会話集と教材の継続した改定・開発のための関係者の能力強化を目的とし、その成果を計る指標を設定する。
	1-1	社会福祉局、ろう者組織、ろう学校が標準手話教材語彙編を評価するタスクフォースを選出する。（ヤンゴン・マンダレーよりろう者各6名、ヤンゴン・マンダレーのろう学校より庁舎の教師各3名、社会福祉局2名）	社会福祉局、ろう者組織、ろう学校がミャンマー手話教材と研修を評価するタスクフォースを選出する。（ヤンゴン・マンダレーよりろう者各6名、ヤンゴン・マンダレーのろう学校より聴者の教師各3名、社会福祉局より2名）	
	1-2	日本もしくは第三国からの専門家がタスクフォースに対し、標準手話教材語彙編評価に係るトレーニングを実施する。	日本もしくは第三国からの専門家がタスクフォースに対し、ミャンマー手話教材と研修の評価に係る研修を実施する。	
	1-3	タスクフォースが標準手話教材語彙編を評価する。	タスクフォースがミャンマー手話教材を評価する。	
	1-4	タスクフォースが標準手話教材語彙編の将来的な改定に向けた計画を策定する。	タスクフォースがミャンマー手話教材についての評価報告書を作成し共有する。	
	1-5		タスクフォースがミャンマー手話研修を評価する。	
	1-6		タスクフォースがミャンマー手話研修の評価報告書を作成し共有する。	
	指標	1-1.標準手話教材語彙編用の評価レポートの作成 1-2.標準手話教材語彙編用の改定計画の策定	1-1.タスクフォースがミャンマー手話会話集と研修の評価ツールを作成する。 1-2.タスクフォースによる評価報告書の作成数 1-3.評価報告書の結果が反映された事例	
成果2	標準手話教材文法編がろう者コミュニティの主導により作成される。		ミャンマー手話会話集がろう者コミュニティの主導により作成される。	
	2-1	タスクフォースが標準手話教材文法編作成の計画をつくる。	タスクフォースがミャンマー手話会話集作成の指針をつくる。	英文表記に合わせた変更
	2-2	タスクフォースが標準手話教材文法編を作成する。	タスクフォースがミャンマー手話会話集を作成する。	
	2-3	JCCが2-2の標準手話教材文法編を承認する。	JCCが2-2のミャンマー手話会話集を承認する。	
	2-4	標準手話教材文法編を作成・配布する。	ミャンマー手話会話集を製本・配布する。	
	指標	2-1.標準手話教材文法編の作成 2-2.ろう者が教材作成活動に参加した事例	2-1.ミャンマー手話会話集の作成 2-2.タスクフォースのミャンマー手話会話集に対する満足度が５段階の４以上と評価される 2-3.ミャンマー手話会話集の配布数	ミャンマー手話教材の配布状況及び教材の質にかかわる指標を追加する。
成果3	ろう者とその家族、手話通訳候補者、ろう学校教師が標準手話を習得する。		タスクフォース、ファシリテーターがミャンマー手話教材に基づき、手話指導の技術を習得する。	プロジェクトにおいてミャンマー手話を指導する役割を担う関係者の研修実施能力の向上に絞り込む形にする。
	3-1	タスクフォースが語彙編と文法編を活用した標準手話研修の計画をつくる。	タスクフォースがミャンマー手話研修の計画を策定する。	
	3-2	社会福祉局、ヤンゴン・マンダレーのろう者組織及びろう学校がファシリテーターを選出する。（タスクフォースのメンバー及びろう者数名を追加する。）	社会福祉局、ヤンゴン・マンダレーのろう者組織及びろう学校がファシリテーターを選出する	
	3-3	日本もしくは第三国からの専門家がファシリテーターに対し、手話教授法に関するトレーニングを実施する。 （2～4週間）	日本もしくは第三国からの専門家がタスクフォースとファシリテーターに対し、手話教授法に関するトレーニングを実施する。	トレーニング対象者としては、タスクフォースも含める。
	3-4	ファシリテーターはろう者に対する標準手話トレーニングを実施する。（5時間×5日）	タスクフォースとファシリテーターはミャンマー手話研修の指導計画と教材を作成する	より具体的な活動内容に修正
	3-5	ファシリテーターはろう者の家族に対する標準手話トレーニングを実施する。（5時間×5日）	タスクフォースとファシリテーターがミャンマー手話研修を実施する。	より具体的な活動内容に修正
	3-6	ファシリテーターはろう学校教師に対する標準手話トレーニングを実施する。（5時間×5日）		
	指標	3-1.標準手話（SSL)研修を受講したろう者とその家族、手話通訳候補者、ろう学校教師数	3-1.タスクフォースによるミャンマー手話研修の指導計画 3-2.参加者の指導に関する知識についての満足度が５段階の４以上と評価される 3-3.参加者の教材についての満足度が５段階の４以上と評価される	指導者によって実施された研修の質にかかわる指標として設定する。
成果4	ろう者に関するコミュニティ（一般市民）の意識が向上する。		ろう者に関するコミュニティ（一般市民）の意識が向上する。	
	4-1	ファシリテーターが啓発活動の計画をつくる。	タスクフォースがミャンマー手話研修（州レベル）の内容を策定する。	活動の具体化に伴い、記述内容を修正。
	4-2	ファシリテーターが啓発活動に必要な資料を作成する。	社会福祉局が州研修実施のための運営委員会を設置する。	
	4-3	ファシリテーターがソーシャルワーカーを対象にワークショップを実施する。 （ヤンゴンとマンダレーで各1～2回）	社会福祉局とタスクフォースがミャンマー手話研修（州レベル）の実施計画を策定する。	
	4-4	ファシリテーターが一般校教師・生徒を対象にワークショップを実施する。 （ヤンゴンとマンダレーで各1～2回）	社会福祉局が州の担当者を選出する。	
	4-5	ファシリテーターがローカル・国際NGOを対象にワークショップを実施する。 （ヤンゴンとマンダレーで各1～2回）	社会福祉局とタスクフォース、ファシリテーターが州の担当者を対象にしたミャンマー手話研修（州レベル）に関するセミナーを実施する。	
	4-6	ファシリテーターがろう者と上記ワークショップ参加者が交流するイベントを実施する。（ヤンゴンとマンダレーで各1回）	社会福祉局、タスクフォース、ファシリテーターがミャンマー手話研修（州レベル）を実施する。	
	指標	4-1.ワークショップの開催数、参加人数	4-1.州レベルで実施するミャンマー手話研修の開催数と参加人数 4-2.州レベルで実施するミャンマー手話研修の参加者のろう者についての理解度が５段階の４以上と評価される。	啓発活動による直接的な成果指標として、ワークショップ開催数、参加人数に加えて、意識向上も指標とする。

ジャイカ
JICA